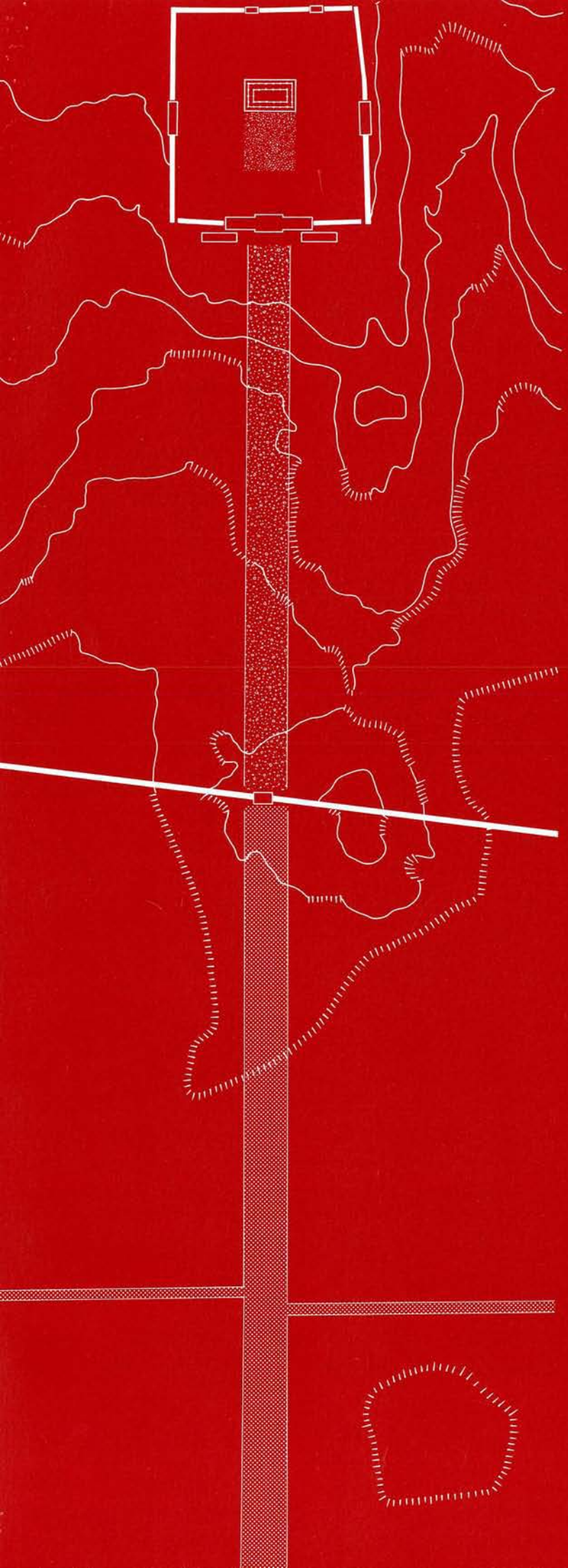


多賀城市文化財調査報告書第50集

市川橋遺跡

—第11次調査報告書—

平成10年3月

多賀城市教育委員会

例　　言

1　本書は、平成４年度に実施した多賀城市中央公園建設に係る確認調査の成果をまとめたものである。
2　挿図中の高さは標高値である。
3　平面図における座標値は国土座標「平面直角座標系Ｘ」を使用して設定した。
4　土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を使用した。
5　本書の第２図は国土地理院発行の１／50,000の地形図「仙台」「塩竈」を複製して使用した。
6　今回の調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関からご指導、ご協力を賜った。
　宮城県教育庁文化財専門監　桑原滋郎、同文化財保護課長　進藤秋輝、東北歴史資料館研究部長　小井川和夫、同文化財保護課調査第一係長　加藤道男、同調査第二係長　真山　悟、宮城県多賀城跡調査研究所主任研究員　丹羽　茂、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所
7　本書の執筆・編集は千葉孝弥が担当した。図版作成に際し、整理員柏倉霜代、伊藤美恵子、村上和恵、鹿野智子、渡邊奈緒の協力を得た。
8　調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と地理的・歴史的環境……2
Ⅱ　調査に至る経緯……3
Ⅲ　調査方法と経過……3
Ⅳ　発見した遺構と遺物……5
Ⅴ　考　　察……25

調　査　要　項

1　遺 跡 名　市川橋遺跡
2　所 在 地　多賀城市市川八反田、館前地内
3　調査面積　3,429m²（対象面積　40,000m²）
4　調査期間　平成５年２月15日～平成５年３月12日
5　調査主体　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井茂男
6　調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　　所　長　斎藤一司
7　調 査 員　多賀城市埋蔵文化財調査センター
　瀧口　卓　石川俊英　石本　敬　千葉孝弥　相沢清利　菊池　豊（調査補助員）
　宮城県教育庁文化財保護課
　後藤秀一　佐藤則之　菅原弘樹　高橋栄一　金子勇一　吉野　武　東理浩明

Ⅰ　遺跡の位置と地理的・歴史的環境

市川橋遺跡は、仙台市の中心部より北東約10km、多賀城市のほぼ中央部に位置している。特別史跡多賀城跡の南部から南西部にかけて、東西約1.4km、南北約1.6km、総面積約703,000m²におよぶ広大な遺跡である。大部分が水田となっているが、近年宅地造成が進みつつある地域である。

本遺跡の地形についてみると、東側には陸前丘陵の一部である高崎丘陵があり、西側は砂押川が南流している。これらの間は、一部低丘陵も見られるが、ほとんどが標高２～３ｍの沖積地である。この沖積地には、複数の旧河川やそれらによって形成されたと見られる自然堤防、また亜泥炭層が厚く堆積する後背湿地が複雑に分布している。

本遺跡におけるこれまでの調査では、奈良・平安時代の遺構・遺物が多数発見されている。低丘陵上にある大臣宮地区では城内の建物に匹敵する大規模な掘立柱建物、水入地区では小規模な掘立柱建物で構成される区画、高平地区では竪穴住居から掘立柱建物へと変遷する区画とその一部で水田が発見されるなど、多賀城南面の居住空間の在り方を考える上で多くの成果を挙げている。一方、本遺跡西部から山王遺跡にかけては約１町四方の方格地割りが発見されている。これは東西・南北の直線道路によるものであり、現在のところ、それらの道路遺構は南北大路から西は９条、東西大路の北は３条、南は２条まで発見されている[(1)](第３図)。伏石地区を除き本遺跡の大部分では方格地割りの存在は未だ確認されていないが、内陸方面から多賀城に至る幹線道路東西大路は今回の調査区より東側に延びており、さらに、今回の調査対象地区は都城の朱雀大路に擬せられる南北大路の存在が推定されているところであり、多賀城外の方格地割りの実態を考える上で最も重要な地域の一つと言えよう。

(1)　多賀城外の道路について、南北の幹線道路は南北大路、東西については東西大路と呼んでいる。また、それより小規模なものについては大路に近いものから西１道路・西２道路・・、北１道路・北２道路・・と呼んでいる。以下、本文中においてもその名称を使用する。

第１図　遺跡の位置

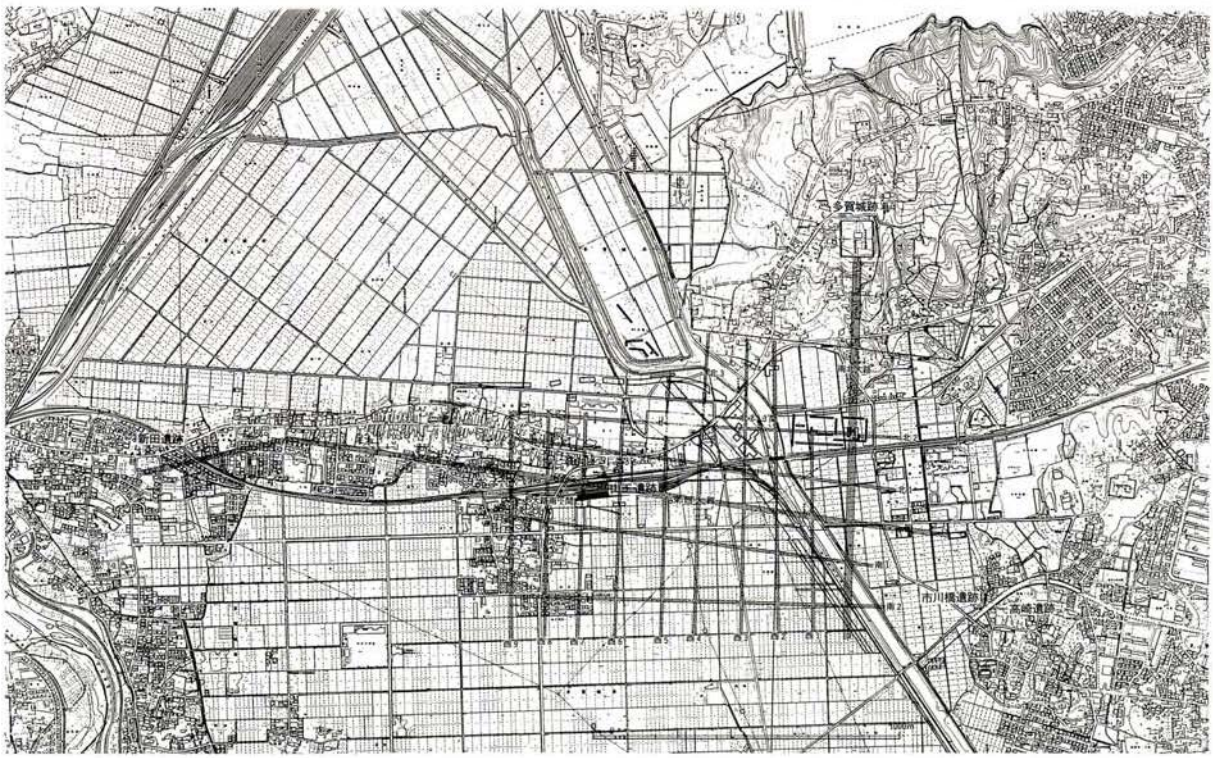
II　調査に至る経緯

平成２年、現在の東北歴史資料館を一新し、別の場所に建設しようという計画が具体化した。用地については、多賀城市側の強い要望もあり、最終的に多賀城市高崎地区に所在する中央公園に決定した。そのため、多賀城市では早急に新しい中央公園用地を確保し、造成工事を行なう必要が生じた。

今回調査の対象となった多賀城市市川地区は特別史跡多賀城跡の南側に隣接し、同時代の多くの遺構の存在が想定される地域であるとともに、史跡と一体のものとして良好な環境の保護に努めねばならない地域である。しかし、周辺地域における近年の開発の進行状況を考慮すると将来的には極めて不安定な状況であり、早急に対策を講じる必要があった。このような状況から、史跡の南側に隣接する広い範囲を公園用地とし、開発の波を史跡の手前で押さえようとする考えが出されるに至り、新中央公園の用地とすることに決定した。平成５年１月21日、市長より教育委員会にあてて正式に調査依頼が提出された。調査日程および調査員の人数など多くの不安材料があったが、１月26日に県文化財保護課と協議したところ、調査員の派遣を含め、全面的な協力が得られることとなった。調査区は多賀城南門からおおよそ180mであり、近年次第に明らかになりつつある多賀城外の様子を知る上で非常に重要な地域であり、しかも南北大路の存在が確実視されるなど今後周辺地域の調査に与える影響が大きいとの認識であった。こうして準備が進められ、平成４年度内の調査終了を目指し、２月15日から約１カ月で確認調査を実施することになった

III　調査方法と経過

本調査は緊急調査であり、すべての遺構に対しての詳細な調査は不可能であることから、本地区の性格を最も端的に示すと考えられる古代の道路遺構の確認を第一目標とした。本調査区内には南北大路以外にも南北道路１条、東西道路４条の存在が想定されていることから、それらの推定ライン上に東西・南北の



第２図　多賀城外の道路と方格地割り

トレンチNo.1～6を設定した。これらは対象地区内を一周するように、互いに平行・直交するように設定した。さらに、それらの内側には各道路の交差点のあり方や、遺構の分布状況を見るためNo.7～12トレンチを設定した。調査面積は合計3,429m²であり、対象面積40,000m²に対する割合は約9％である。確認調査という性格上、遺構の平面的な調査にとどめたが、土層堆積状況の観察や重複状況の確認のため一部断ち割りを行った。遺構の測量にあたっては、各トレンチごとに設定した任意の基準点を使用し、それらに対して国土座標の成果を与えるという方法を採った。実測図は遺構の内容に応じ縮尺1/100と1/20で作成した。調査の主な経過については以下のとおりである。

2月15日　調査開始。重機2台を導入し、東側のNo.1トレンチ、西側のNo.4トレンチから表土除去開始。No.2トレンチでは幅20m以上の南北大路の存在を確認。No.3トレンチでは広い範囲が湿地となっていることなどを把握。No.4トレンチでは全面的に柱穴や土壙などが密集していることが判明。調査の初日から大きな成果を得る。

2月16日　トレンチ配置図作成。

2月17日　雨のため作業休み（～2.18）。

2月19日　No.11トレンチ表土除去。須恵器や緑釉陶器など多数出土。

2月22日　No.10トレンチにおいて東西大溝ＳＤ449の西端部を断ち割る。

2月23日　雨のため作業休み。

2月25日　No.10トレンチ平面図、西壁断面図作成。

3月2日　各トレンチにおいて遺構の概要が把握されたため、現地にて、宮城県教育庁文化財保護課長はじめ関係者による検討会を行う。これにより、さらに調査すべき部分が指摘され、残された期日の中でその解明に当たるよう指導を受ける。参加者は次のとおりである（所属：当時）。

桑原滋郎・小井川和夫・後藤秀一・佐藤則之・菅原弘樹・高橋栄一・吉野　武・金子勇一・東理浩明（宮城県教育庁文化財保護課）、千葉景一・進藤秋輝・丹羽　茂・真山　悟・柳沢和明・村田晃一（宮城県多賀城跡調査研究所）、阿部博志（東北歴史資料館）、高倉敏明（多賀城市教育委員会文化財係）、斎藤一司・瀧口　卓・石川俊英・千葉孝弥（多賀城市埋蔵文化財調査センター）

3月4日　No.7トレンチで検出した南北大路の精査。東側溝は黒褐色土の下に良好に残存していることが判明。西側溝には北2道路が連結することを確認（～3.5）。

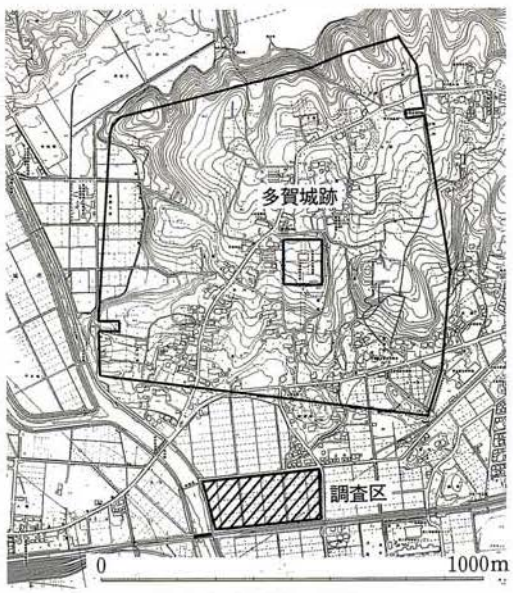
3月8日　No.7トレンチ東拡張区の実測準備。

3月9日　No.1トレンチは黄褐色砂層によって覆われていたが、その下に側溝が存在する可能性が高くなったため、部分的にそれらを除去し、側溝の存在を確認。

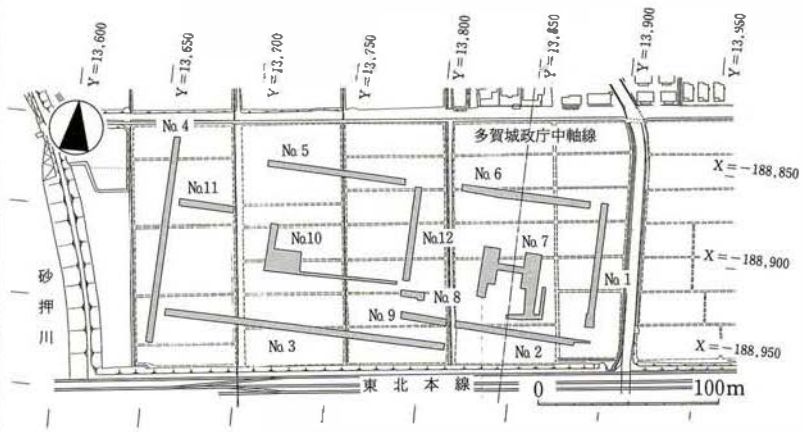
3月10日　No.3トレンチ西1道路断面図作成。No.10トレンチ東側の湿地の広がりを見るため南壁に沿ってトレンチを延ばす。

3月11日　No.3トレンチ平面図作成。南北大路側溝の変遷について検討。No.10トレンチ北半部竪穴住居の平面図作成。

3月12日　No.10トレンチ西1道路ＳＸ450の検討。東西大溝ＳＤ459およびその南側を重機によって断ち割り、大溝の下に北2道路ＳＸ460の側溝と見られる溝を確認。No.4トレンチにおいても同東西大溝の南壁の埋土を一部断ち割り、北2道路の存在を確認。雪解け水が流れ込む中、これらの平面図および断面図を作成して調査終了。天候不順のおり、実働19日の調査となる。



第3図　調査区の位置



第4図　トレンチ配置図

Ⅳ　発見した遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は道路跡７条、道路側溝跡27条、掘立柱建物跡９棟、柱列跡２条、竪穴住居跡12棟、井戸跡１基、瓦組み暗渠１条、円形周溝遺構１基、および多数の柱穴、溝跡、土壙などである。多数の柱穴の存在はさらに多くの掘立柱建物の存在を推定させる。

遺構の記載は便宜上トレンチごとに行なった。したがって、道路跡のように複数のトレンチにまたがるものについては、各トレンチごとに側溝の遺構番号が異なる。道路跡の方向や規模については「Ⅴ　考察」の中で触れる。また、遺物については一部遺構に伴うものもあるが、大部分は表土から出土したものであり、後で一括して概要を記すにとどめた。

1．№7トレンチ

調査区東半部のほぼ中央に設定したＨ字形のトレンチである。南東隅をさらに東西方向と北側にそれぞれ拡張している。このトレンチのほぼ中央部において南北大路、北２道路、掘立柱建物１棟、井戸跡１基、および道路廃絶以降の溝跡３条などを発見した。北東部には南北大路の側溝を覆う黒色土（第Ⅱ層）があり、それを除去することによって側溝を検出することができた。しかし、その黒色土は溝状に深く落ち込む部分があり、すべてを除去していない。また、南東隅から北側へ延長した拡張区の北端部では灰白色火山灰の自然堆積層（第Ⅴa層）やそのブロックを含む第Ⅳa層が堆積している。

【ＳＸ410・430】中央部で発見した南北大路である。北２道路ＳＸ420・440・423と交差しており、それより北側をＳＸ410、南側をＳＸ430とする。ＳＸ410は東側溝ＳＤ411と西側溝ＳＤ412、ＳＸ430は東側溝ＳＤ413、西側溝ＳＤ414を伴っている。これらについては平面的に確認したものであり、断ち割りは行っていない。したがって、各側溝において新旧関係を明らかにできなかったものが多く、東西両側溝の対応関係を把握できたものは少ない。以下、各側溝ごとに検出状況を述べる。

ＳＤ411は第Ⅱ層に覆われており、それを除去した部分で４時期の重複を確認した。古い順にａ→ｂ→ｃ→ｄである。ｃは側溝埋土に灰白色火山灰粒が混入している。規模は、ｂ・ｃのいずれも上幅１ｍ以上である。ＳＤ413は北側をＳＤ423やＳＤ406によって切られており、ＳＤ411と分断されている。６時期の重複を確認した。新旧関係は古い順にａ→ｂ→c_1或はc_2→ｄ→ｅである。埋土についてみると、c_1は灰白色火山灰ブロックを多量に含んでおり、ｂは粗砂を主体としているのが特徴である。ＳＤ412では６～８時期の重複を確認した。新旧関係は古い順にａ→ｂ→ｃ→ｄ→ｅであり、ｘ→ｙ→ｚ→ｅである。ｘ期の埋土上層には灰白色火山灰が自然堆積しており、ｄ期埋土にはそのブロックが多く混入していることから前者が古いと考えられる。ａ～ｃとｘ、ｄとｙ・ｚの関係は不明である。ＳＤ414は南西隅で発見した。ＳＤ407によって切られており、ＳＤ412と分断されている。わずかにその西壁の一部を検出したにすぎない。この西側で砂層上に堆積した灰白色火山灰のブロックを検出した。これについては「Ⅴ　考察」で改めてふれたい。

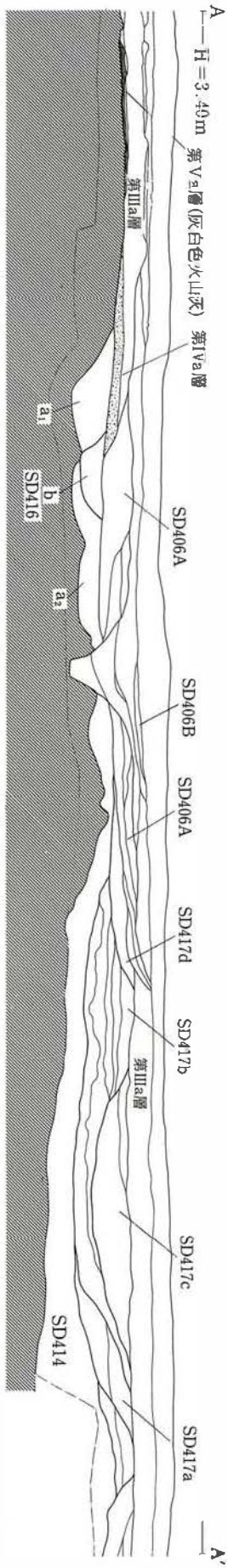
交差点における側溝の形態：ＳＤ413ｅはＳＤ423の南側まで南北に延びている。ＳＤ413ｄはＳＤ423の南側で北２道路の北側溝ＳＤ408に続いている。ＳＤ413c_1はその西壁に北２道路の北側溝ＳＤ408と南側溝ＳＤ409が接続している。北２道路は大路の路面を横切っているが大路の東側には延びていない。東壁側の状況は不明である。ＳＤ413ｃ2はＳＤ423の南側で東側に折れ曲がり、ＳＤ417ｃに続いている。ＳＤ413ｂも同様で、ＳＤ417ｂに続いている。ＳＤ413ａはＳＤ417・409の南側までしか確認できないが、ＳＤ409・Ｓ

D417ａと合流している。

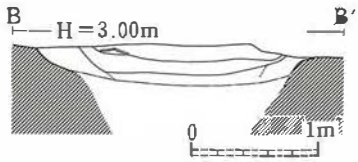
規模：東西両側溝で確実に対応すると考えられるものは①最も新しい東側溝ＳＤ413ｅ・西側溝ＳＤ412ｅ、②灰白色火山灰ブロックが多く混入しているＳＤ413ｃ・ＳＤ412ｄの二つの組み合わせである。①についてみると、埋土の中央に側溝中心を想定すると約24m、路面が約22mである。②については、それぞれの埋土東端部に側溝中心を想定すると約24mである。

【ＳＸ440】ＳＸ410の東側に連結する北２道路である。北側溝はＳＤ416、南側溝はＳＤ417である。北側溝ＳＤ416は第IIIa層から掘り込んでいるＳＤ406によって覆われているため断面で確認したのみである。３時期の重複があり、古い順にa_1→ｂあるいはa_2→ｂである。南側溝417は３時期の重複があり、古い順にａ→ｂ→ｃである。最も新しいｃはＳＸ430c_2と一連の遺構である。道路の規模は、最も新しい段階のＳＤ416ｂ・ＳＤ417ｃでみると側溝心心間で約6.5m、路面で約5.0mである。それより古い段階のＳＤ416a_2・ＳＤ417ｂの組み合わせでみると、側溝心心間で約5.0mである。

【ＳＸ420】ＳＸ410の西側に連結する北２道路である。北側溝と南側溝を伴っ



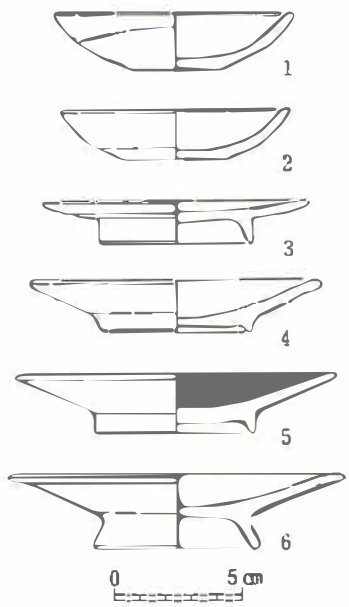
第５図　SX440・SD415断面図



第６図　SE419断面図

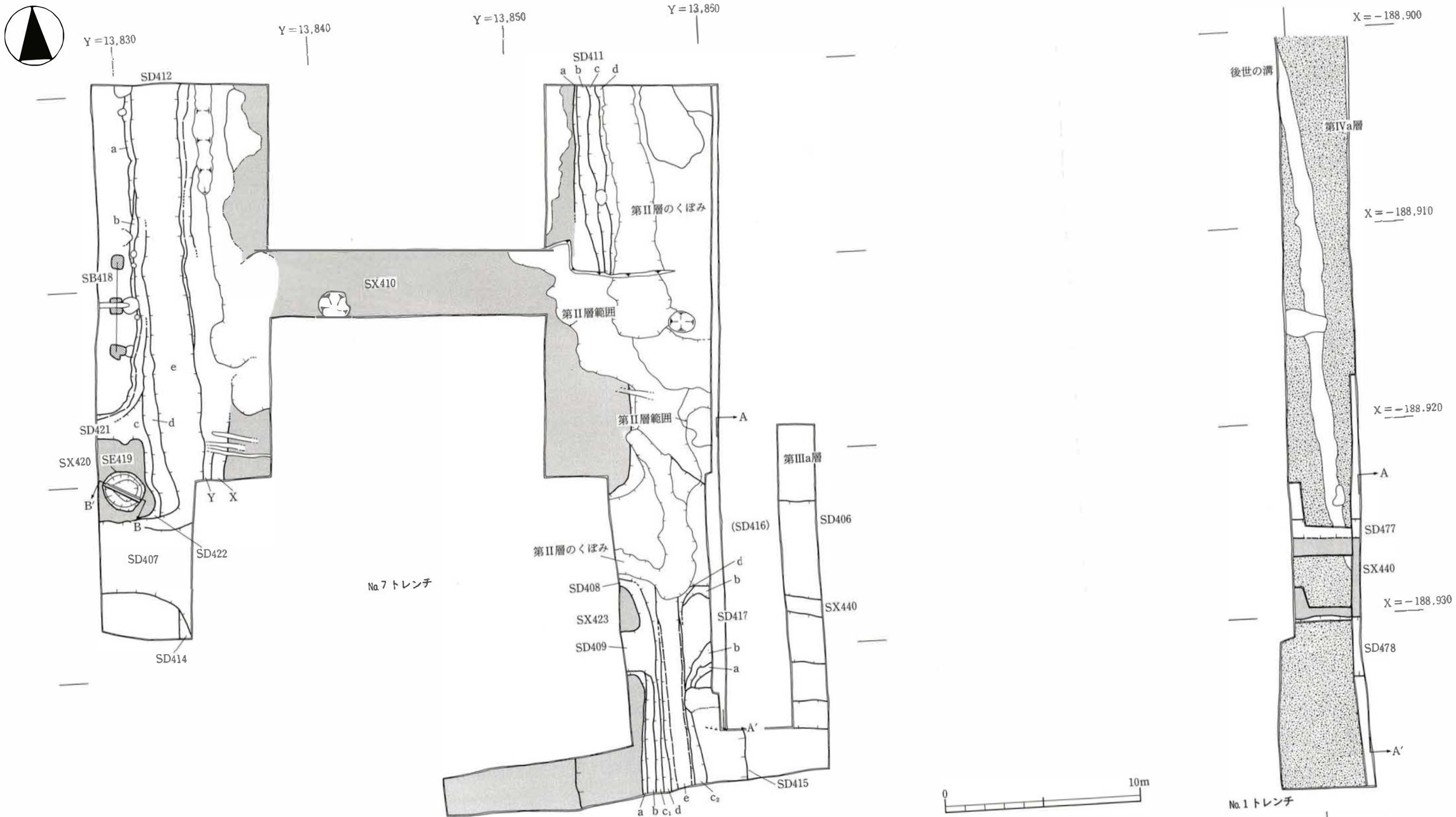
表１　SE419出土遺物集計表

種別	器種	調整	点数
土師器	杯		23
		ロクロ	2
		糸切り	2
	高台杯		1
	甕		35
		ロクロ	11
		糸切り	1
		非ロクロ	13
須恵器	杯		3
		糸切り	2
	瓶		1
	壺		10
赤焼き土器	杯		85
	小型杯		2
	高台杯		2
平瓦	IIB類		5
	IIC類		3
丸瓦	IIB類		1
合計			202



番号	種類	遺構・層位	口径	底径	器高	登録番号
1	赤焼き土器 小型杯	SE419 1層	9.4 24/24	3.3 24/24	2.3	R−24
2	赤焼き土器 小型杯	SE419 3層	(9.0) 9/24	(4.0) 12/24	2.0	R−28
3	赤焼き土器 高台皿	第I層	(10.5) 7/24	(5.9) 10/24	1.7	R−27
4	赤焼き土器 高台皿	第II層	(11.5) 8/24	(9.5) 24/24	2.1	R−26
5	赤焼き土器 高台皿	第II層	(12.6) 2/24	6.4 24/24	2.4	R−25
6	赤焼き土器 高台皿	第I層	(13.2) 4/24	(6.6) 9/24	(3.0)	R−23

第７図　No.7トレンチ出土遺物



第8図　No.1・7トレンチ全体図

ているが、南側溝はわずかに北壁の一部を検出したのみである。北側溝ＳＤ421には３時期の重複があり、新しい順にａ→ｂ→ｃである。ｃはＳＸ410西側溝ＳＤ412ｄより古いことから灰白色火山灰降下以前である。規模はｃで路面約４ｍである。大路内のＳＤ408・ＳＤ409についてはＳＤ413ｃ$_1$段階で側溝心心間が5.7ｍ、路幅2.3ｍである。

【ＳＸ423】南北大路の路面で発見した北２道路である。北側溝ＳＤ408、南側溝ＳＤ409を伴っている。ＳＤ409には２時期の重複が認められ、新しい段階のものはＳＸ430の東側溝ＳＤ413ｃ$_1$に連結している。路幅は約2.5ｍである。

【ＳＢ418】南北大路西側溝の西側において発見した南北に並ぶ３基の柱穴である。西側に展開する建物跡の東妻と想定しておく。方向は北で約２度東に偏している。梁行は約4.6ｍ、柱間は、北より約2.3ｍ、約2.3ｍである。柱穴は0.7×0.8ｍの方形である。

【ＳＥ419】西端部の北２道路路面で発見した素掘りの井戸である。平面形は円形であり、規模は径2.0～2.1ｍである。埋土に灰白色火山灰粒が混入している。約0.2ｍ掘り下げたところ、赤焼き土器小型杯など多数の土器が出土した（表１）。

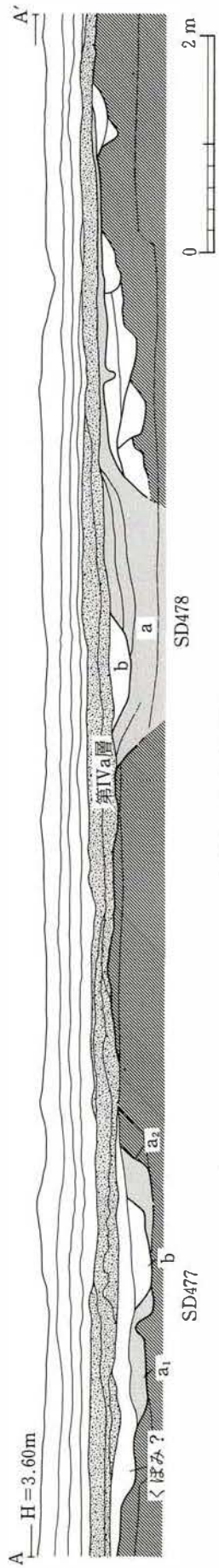
2.　No.1 トレンチ

調査区の最も東側に設定した南北方向のトレンチである。表土を除去すると灰白色火山灰粒を含み硬く締まった砂層（第Ⅳa層）が現れ、その下層で北２道路を発見した。

【ＳＸ440】南半部で発見した北２道路である。北側溝ＳＤ477と南側溝ＳＤ478を伴っている。第Ⅳa層に完全に覆われており、側溝を部分的に検出したのみである。断面観察ではあるが北側溝には２～３時期（Ａ$_1$或はＡ$_2$→Ｂ）、南側溝には２時期（Ａ→Ｂ）の重複が認められる。①ＳＤ477Ａ$_1$とＳＤ478Ａ、②ＳＤ477Ａ$_2$とＳＤ478Ａ、③ＳＤ477ＢとＳＤ478Ｂの三通りの組み合わせを想定すると、①では側溝心心間で6.9ｍ、路面で5.1ｍであり、②では側溝心心間で5.6ｍ、路面で3.5ｍ、③では側溝心心間で5.3ｍ、路面4.3ｍである。路面は道路の外側より低くなっており、残存状況が良いと見られるＳＤ478Ａの南側と比較すると、おおよそ10～15cm低い。各側溝の規模については以下の表のとおりである。

表２　SD477・478の規模

遺構名	上幅	下幅	深さ	遺構名	上幅	下幅	深さ
ＳＤ477Ａ１	0.9m以上	0.6m	約0.3m	ＳＤ478Ａ	3.5m	—	0.4m以上
ＳＤ477Ａ２	1.7m	1.3m	約0.3m	ＳＤ478Ｂ	1.1m	0.5m	0.2m
ＳＤ477Ｂ	1.1m	0.7m	約0.3m				



第９図　SX440断面図

3. No.2トレンチ

調査区東半部の南側に設定した東西方向のトレンチである。南北大路、掘立柱建物1棟および多数の溝跡や土壙などを発見した。

【ＳＸ410】中央部で発見した南北大路である。東側溝ＳＤ431と西側溝ＳＤ432・433を伴っている。東側溝ＳＤ431にはほぼ同位置で8時期の重複がある。a_1はそのおおよそ中央に、a_2はその西側に位置している。両者の新旧関係は不明である。ｂ～ｆは新しくなるにつれて中心が東側にわずかずつ移動している。西側溝はＳＤ432とその西側にＳＤ433がある。ＳＤ433は中心が東側にわずかずつ移動して7時期の重複がある。両者に直接の重複関係はないが、ＳＤ432は灰白色火山灰より古いことと、ＳＤ433には連続性が窺われることからＳＤ432がＳＤ433に先行する可能性が高いと考えられる。従って、側溝の組み合わせは、Ａ期ーＳＤ431a_1・ＳＤ432、Ｂ期ーＳＤ431a_2・ＳＤ433ａ、Ｃ期ーＳＤ431ｂ・ＳＤ433ｂ、Ｄ期ーＳＤ431ｃ・ＳＤ433ｃ、Ｅ期ーＳＤ431ｄ・ＳＤ433ｄ、Ｆ期ーＳＤ431ｅ・ＳＤ433ｅ、Ｇ期ーＳＤ431ｆ・ＳＤ433ｆ、Ｈ期ーＳＤ431ｇ・ＳＤ433ｇと考えられる。

規模：最も古いＡ期は側溝心心間で約19m、Ｂ期は側溝心心間で約22m、路面が約21ｍである。最も新しいＨ期は側溝心心間で約23m、路面が約22ｍである。Ｂ期以降はＡ期より約3～6ｍ規模が大きくなっている。

側溝の埋土：東側溝ＳＤ431についてみると、a_1は炭化物を含む粘質土であり、a_2期は地山ブロックを含む粘質土である。ｂは砂と粘土が互層になっており、ｃは砂が主体である。ｄ・ｅ・ｆは粘質土を主体とし、砂を多く含んでいる。一方、西側溝ＳＤ432は上層に地山や暗灰黄色粘質土のブロックを多量に含んでおり、その下に砂層をはさんで最下層に粘質土が堆積している。ＳＤ433ａは上層が粘質土、下層が砂質土である。ｂは上層に多量の炭化物を含む粘質土や砂質土があり、粗砂層をはさんで下層が粘質土である。ｃは砂が主体を占めている。ｄは灰白色火山灰ブロックが混入している砂質土である。ｅは炭化物を含む粘質土であり、ｆは炭化物や焼土など混入物が多い。各側溝の規模については表3に示したとおりである。

【ＳＢ428】ＳＸ430の西側で発見した掘立柱建物跡である。南北基準線上に並ぶ2基の柱穴からなる柱列を2条検出したのみであるが、それぞれ東西側柱列と見て南北棟を想定しておきたい。ＳＸ430西側溝ＳＤ432と重複しており、それより古い。方向は北でわずかに西に偏している。柱間は、東側柱列で約2.0m、西側柱列で約1.8mである。梁行は約4.2mと推定される。柱穴は一辺60～70mの方形である。一つの柱穴で柱痕跡を検出しており、径20cmである。

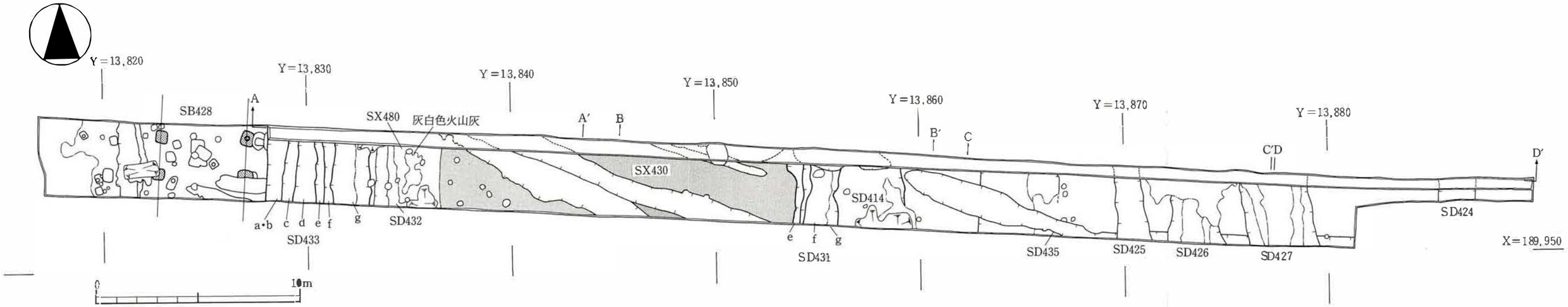
【ＳＤ431】ＳＸ430東側溝と重複し、それより古い南北溝跡である。規模は、上幅4.9m以上、下幅2.3m以上、深さ0.6mである。埋土は暗灰黄色砂質土で、下層には粗砂が堆積している。

4. No.6トレンチ

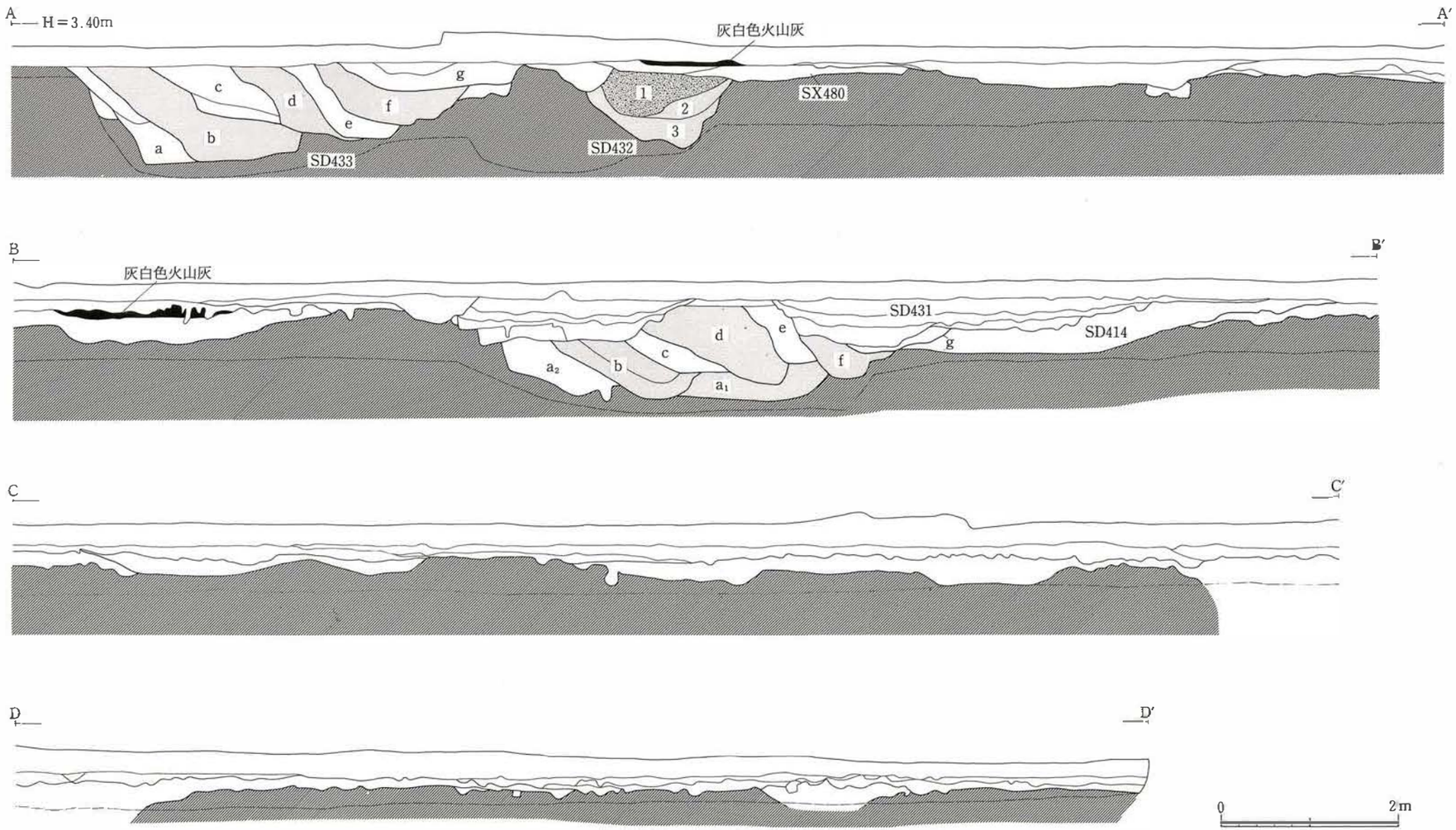
調査区東半部の北側に設定した東西方向のトレンチである。南北大路、溝跡7条などを発見した。平面的に検出した遺構が少なく、大部分は北壁際における断面観察による。

【層序】トレンチの東半部には表土の下に黄褐色の粘質土や砂質土（第Ⅲb層）、灰白色火山灰小ブロックが混入しているオリーブ黄色砂質土や灰オリーブ色の砂（第Ⅳb･Ⅳc層）があり、第Ⅳc層上面は遺構検出面となっている。その下には凹凸のある黒褐色粘質土（第Ⅴb層）が堆積しており、水田層あるいは湿地などの可能性が考えられる。

【ＳＸ410】No.7トレンチで発見した南北大路の北側延長部分である。東側溝ＳＤ436には8時期の変遷が



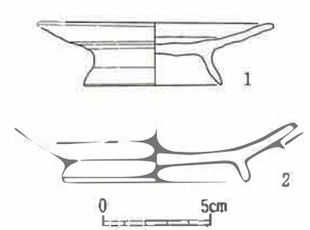
第10図　No.2 トレンチ全体図



第11図　No.2 トレンチ断面図

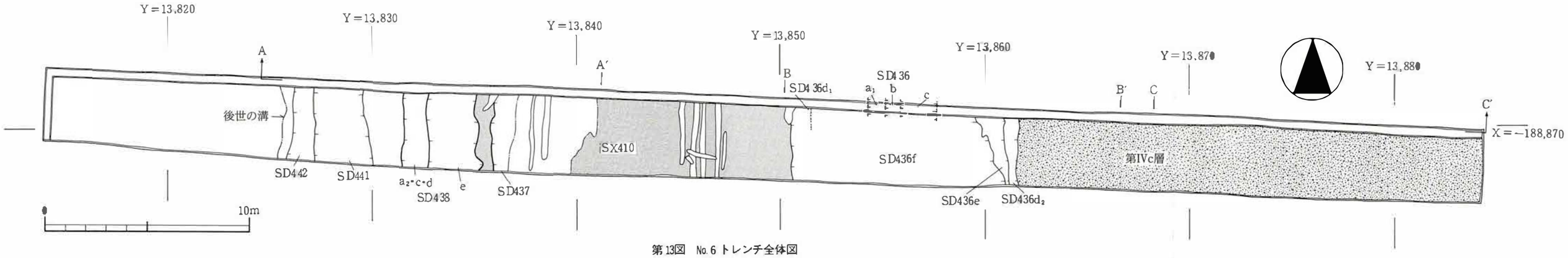
表3　SD431・432・433の規模

時期	西側溝				東側溝			
	遺構名	上幅	下幅	深さ	遺構名	上幅	下幅	深さ
A	SD432	1.7m以上	0.5m	1.0m	SD431 a_1	1.7m以上	1.1m以上	1.1m
B	SD433 a	1.5m以上	0.6m以上	1.1m	SD431 a_2	1.4m以上	1.3m以上	1.0m
C	SD433 b	2.5m以上	1.1m	1.1m	SD431 b	1.7m以上	0.4m	1.0m
D	SD433 c	1.5m以上	0.9m以上	0.6m	SD431 c	1.2m以上	0.6m以上	0.8m
E	SD433 d	1.5m以上	0.9m以上	0.9m	SD431 d	1.7m以上	0.5m	0.9m
F	SD433 e	1.4m以上	0.5m	0.9m	SD431 e	0.9m以上	0.3m以上	0.6m
G	SD433 f	1.8m以上	1.0m	0.7m	SD431 f	1.1m以上	0.4m	0.8m
H	SD433 g	2.1m	1.3m	0.3m	SD431 g	1.2m以上	0.4m	0.6m

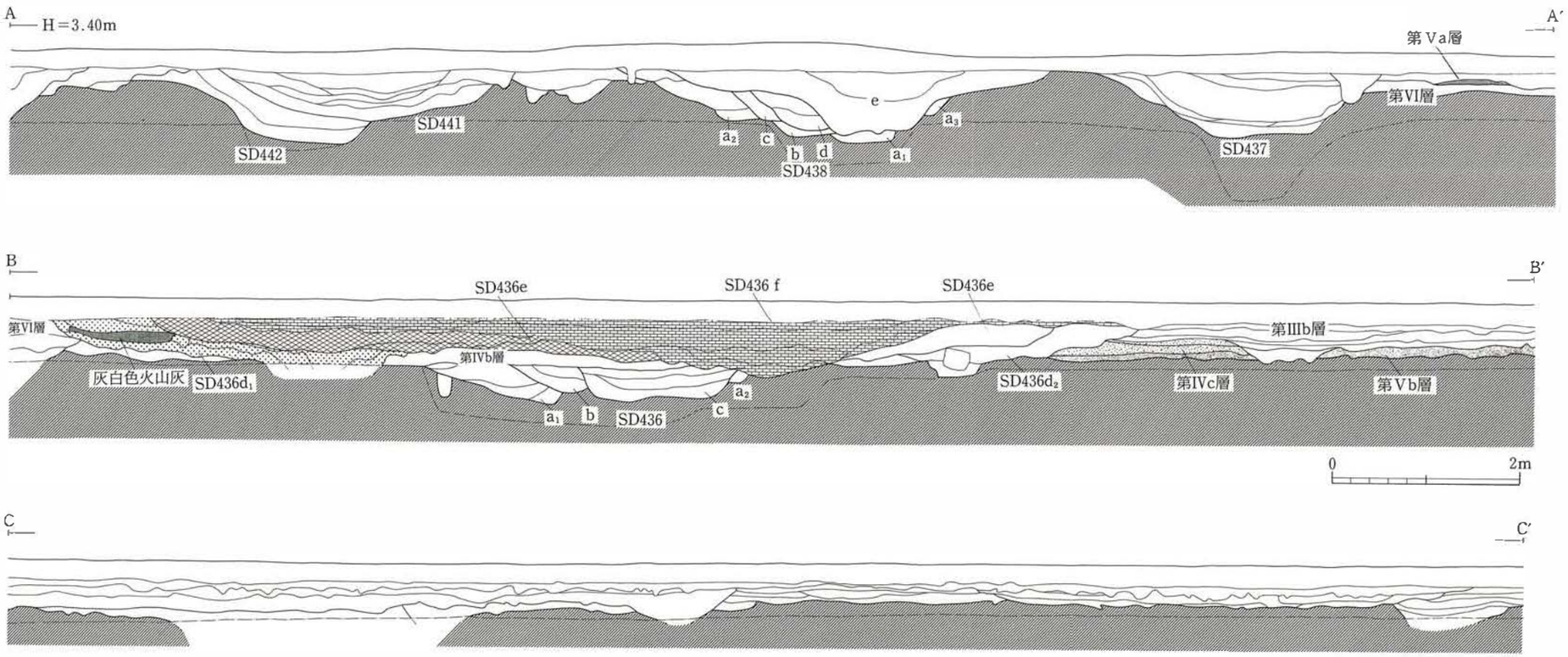


番号	種類	遺構・層位	口径	底径	器高	登録番号
1	赤焼き土器 高台皿	H期1層	11.0 12/24	6.4 24/24	2.9	R－4
2	灰釉陶器碗	H期1層	—	(8.7) 7/24	—	R－51

第12図　SD433出土遺物



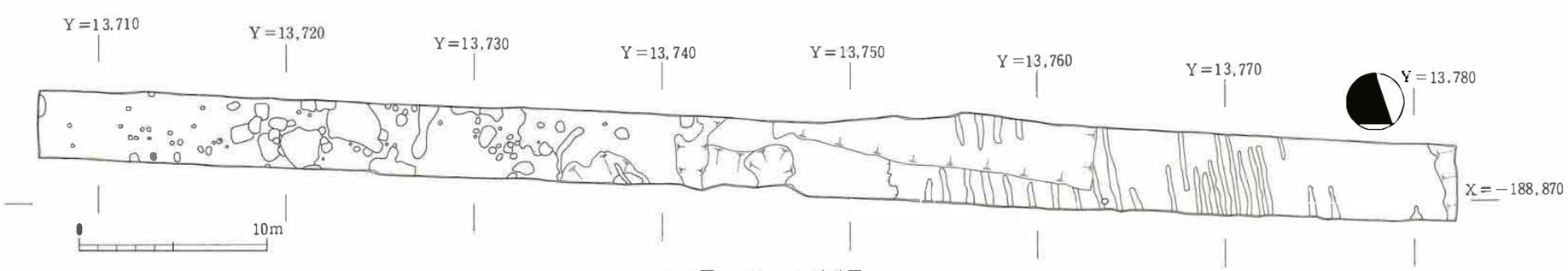
第13図　No. 6 トレンチ全体図



第14図　No. 6 トレンチ断面図

表 4　SD436・437・438の規模

時期	西側溝				東側溝			
	遺構名	上幅	下幅	深さ	遺構名	上幅	下幅	深さ
A	SD437	2.7m以上	1.1m	0.7m	SD436a			
B	SD438a₁	0.7m以上	0.5m	0.8m	SD436b			
C	SD438a₂	1.6m以上	0.4m以上	0.5m	SD436c			
D	SD438a₃	—	—	0.5m	SD436c			
E	SD438b	0.7m以上	0.5m以上					
F	SD438c	0.5m以上	0.2m以上	0.5m				
G	SD438	0.9m以上	0.3m以上	0.6m				
H	SD438e	4.2m	0.8m	0.7m				



第15図　No.5トレンチ全体図

あり、新旧関係は古い順にa_1或はa_2→b→c→d_1或はd_2→e→fである。路面に近いということを重視すればa_2よりもa_1に古い要素があり、d_1も灰白色火山灰との関係からd_2より古いと考えられる。従って、a_1→a_2→b→c→d_1→d_2→e→fの変遷を考えておきたい。d_1は第VI層上面、d_2は第IIIb層上面で検出した。a_1・a_2・b・cは第IVb層に覆われている。d_1・d_2以降は側溝の形態に変化が認められる。細部で違いはあるが、一様に幅が広く浅い形態になっている。西側溝はSD437とその西側のSD438である。SD437は底面に灰白色火山灰が自然堆積しているSX479によって覆われている。SD438はほぼ同位置で7時期の重複があり、古い順に①a_1或はa_2→b→c→d→e、②a_3→eであり、全体的な順番は明らかでない。側溝の組み合わせで確実なものとしては、最も古いA期がSD436a・SD437、最も新しいH期がSD436f・SD438eである。

規模：最も古いA期には側溝心心間で約18m、路面は残存部で見ると約16mである。最も新しいH期には側溝心心間で約21.5m、路面で約16.5mである。E期以降の側溝は、幅がそれまでと比較して一段と広くなり、路面の中心も東西に移動している。従って、路面の規模も一定していない。

側溝埋土：東側溝SD436a_1・a_2・bは粘質土を主体とし、cは砂質土と砂が堆積している。d_1は砂質土で上層に厚さ5～13cmの灰白色火山灰の自然堆積層がある。d_2は砂を含む粘質土である。eとfは粘質土を主体としている。西側溝SD437は上層に地山ブロックを多量に含んでおり、砂と粘土の薄い層をはさんで下層に砂質土が堆積している。上層のあり方はNo.2トレンチのSD432と共通している。SD438a_1は最下層を残すのみであるが木片や砂を含む粘質土である。a_2期は上層に砂質土、下層には薄い粘土層を含む砂層である。b期は砂質土、c期は粗砂を含む粘質土、d期は砂質土が主体を占めている。e期は砂質土で、上層に炭化物を多く含む黒褐色土が堆積している。

5. No.5トレンチ

調査区中央部の北側に設定した東西方向のトレンチである。表土を除去すると軟弱な砂層が現れ、その上面において、東半部では南北方向にのびる幅10～40cmの小溝群を東西約22mの範囲で発見し、西半部では不整形の土壙状の落ち込みを多数発見した。

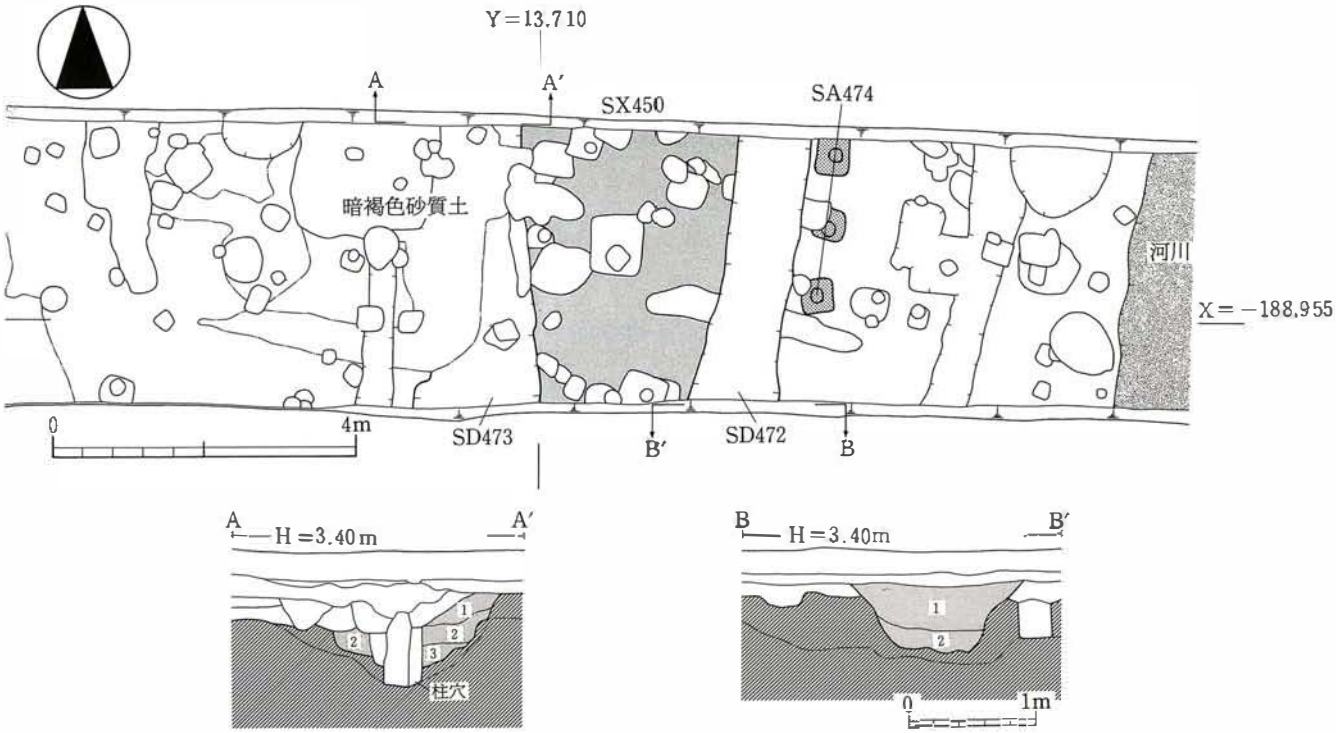
6. No.3トレンチ

最も南側に設定した東西方向のトレンチである。このうち西側三分の一は遺構面まで達しなかった。調査区の中央部から東側にかけての広い範囲で南北方向の河川を発見し、その西側において西1道路、柱列1条、および多数の小柱穴、東側において竪穴住居跡1棟、円形周溝遺構1基などを発見した。

【SX450】河川の西側で発見した西1道路である。東側溝SD472と西側溝SD473を伴っている。東側溝はSA474と重複してそれより新しい。また、西側溝は暗褐色砂質土層によって覆われ、さらに土壙や柱穴などに切られている。前者は南壁際、後者は北壁際をそれぞれ断ち割ったが側溝に改修の痕跡は確認できなかった。路幅は、東側溝が北で東に偏し、西側溝が西に偏していることからトレンチ北壁と南壁でそれぞれ計測すると、北壁では側溝心心間で3.85m、路面で2.80m、南壁では側溝心心間で3.30m、路面で1.94mである。方向は、両壁における側溝心心間を結んだ線で計測すると北で1度東に偏している。側溝についてみると、SD472は、上幅1.4m、下幅0.5m、深さ約0.6mであり、埋土は、上層が炭化物を含む黒褐色土、下層が砂である。SD473は、上幅1.3m以上、下幅0.8m、深さ約0.6mであり、埋土は、砂を主体としている。

【SA474】SX450の東側で発見した南北2間以上の掘立柱列である。SX450と重複しており、それより

古い。３基の柱穴のそれぞれで柱痕跡を検出しており、方向は北で４度東に偏している。柱間は、北より0.96m、0.87mであり、２間分で1.83mである。柱穴は方形で、規模は一辺0.4m、柱痕跡は径20cmである。



第16図　SX450平面図・断面図

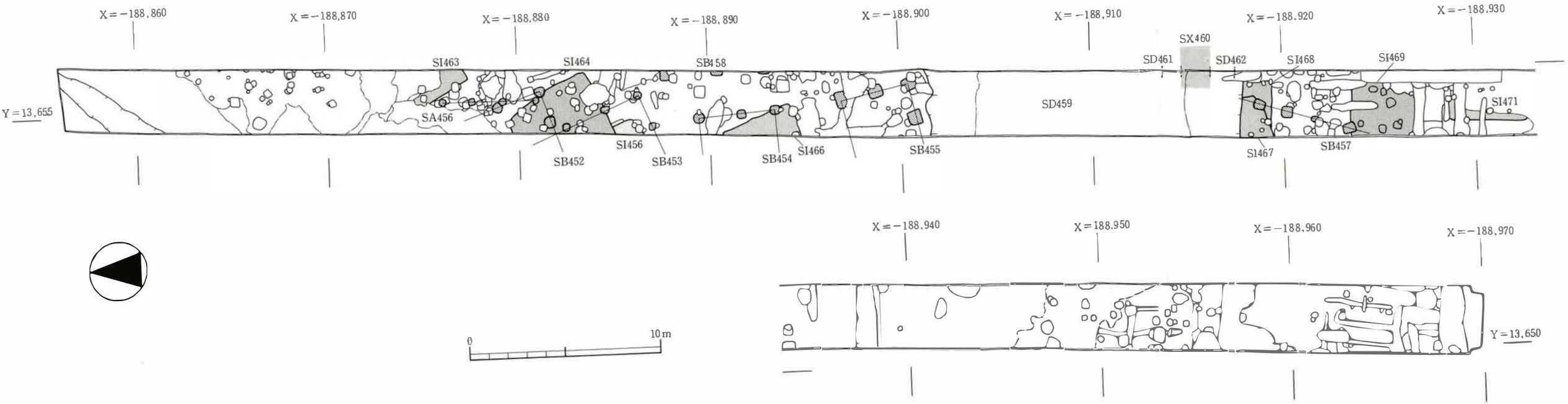
7.　No.4トレンチ

最も西側に設定した南北方向のトレンチである。北２道路、掘立柱建物跡５棟、柱列跡１条、竪穴住居跡８棟、河川跡１条および溝跡、土壙、多数の小柱穴などを発見した。掘立柱建物や竪穴住居跡はトレンチのおおよそ中央部に集中している。以下、道路跡と河川について述べ、掘立柱建物と竪穴住居跡については概要を表に示した（表５）。

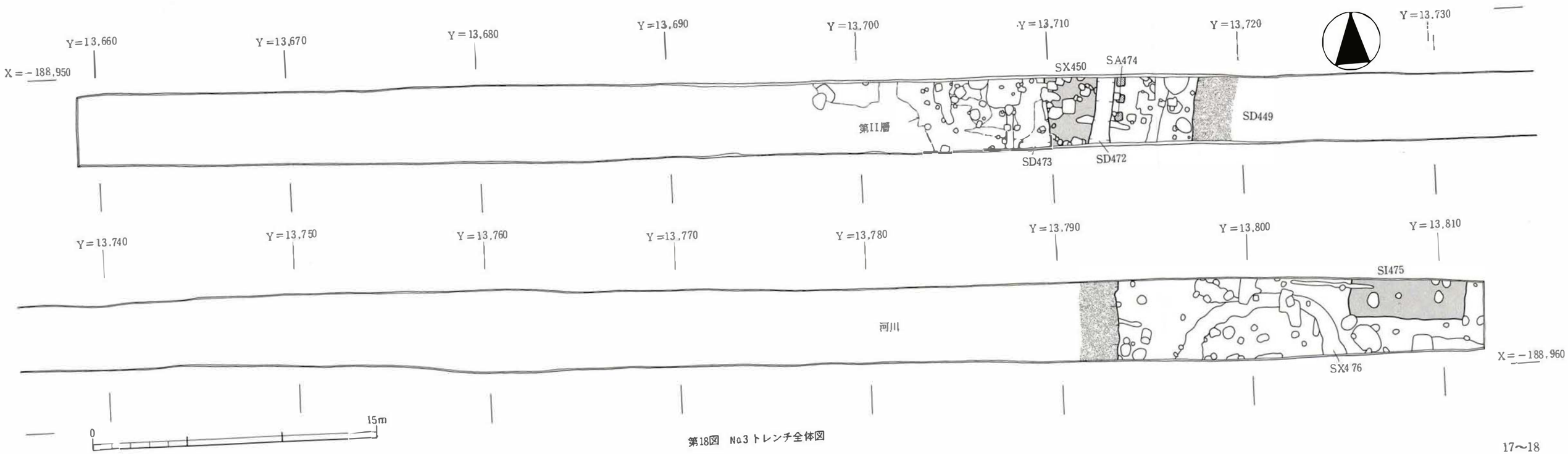
【ＳＸ460】調査区中央部で発見した北２道路である。ＳＤ459河川とほぼ同位置で重複しており、それより古い。同河川埋土を一部掘り下げ、トレンチ東壁面で北側溝ＳＤ461と南側溝をかろうじて検出した。路面は完全に失われている。路幅は側溝芯芯で約2.3mである。

側溝についてみると、ＳＤ461は幅1.0m以上、検出面からの深さは約1.1mである。埋土は最下層が黒褐色粘土である。ＳＤ462は上幅1.3m以上、下幅0.5m、深さ約0.9mである。埋土は上層が暗灰黄色砂質土であり、最下層は砂である。

【ＳＤ459】調査区中央部で発見した東西方向の河川跡である。ＳＸ460と重複し、それより新しい。規模は、幅16.2〜16.8m、深さ約0.9mである。埋土下層には灰白色火山灰小ブロックが混入している。



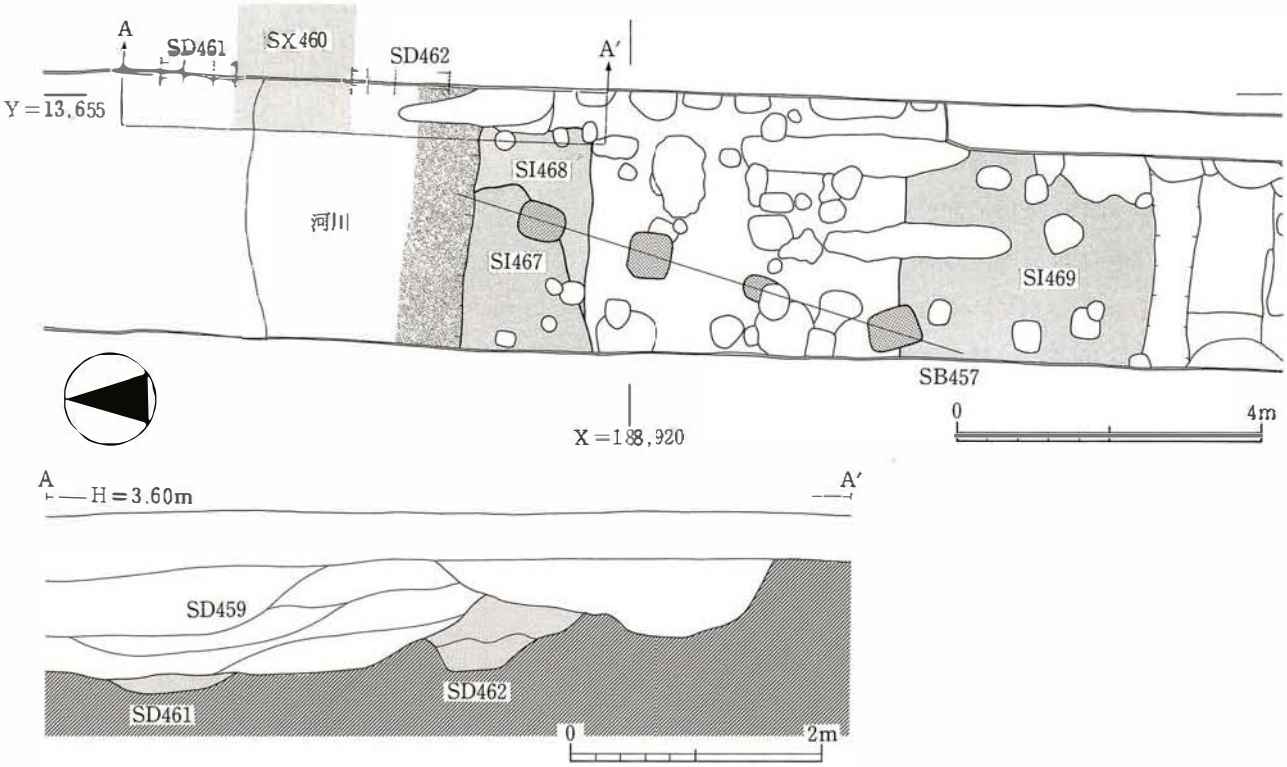
第17図　No.4 トレンチ全体図



第18図　No.3 トレンチ全体図

表5　掘立柱建物跡・竪穴住居跡の規模と方向

遺構名	規模	方向	柱間（北・東より）	柱穴の平面形・規模
SB452	南北1間以上×東西1間以上	N－18－W	南北約2.3m、東西約1.7m	方形、一辺約0.6m
SB453	南北2間以上×東西1間以上	N－22－W	南北約2.2m＋約1.9m、東西約 1.8m	方形、0.4×0.5m
SB454	南北2間	N－4－W	約4.0m（約2.3＋約1.8）	方形、一辺約0.5m
SB455	南北2間×東西2間以上	N－11－W	南北約3.6m（約1.8＋約1.8）東西約1.8m	方形、一辺約0.7m
SB457	南北3間以上	N－12－E	南北約4.9m以上（約1.5＋約1.6＋約1.8）	方形、一辺約0.6m
SB458	南北2間以上	N－2－W	南北5.2m以上（約2.7＋約2.5）	方形、一辺0.6m以上
SA456	南北3間	N－1－E	約4.9m（約1.6＋約1.6＋約1.7）	方形、一辺約0.4m
遺構名	規模	方向	重複関係	
SI463	南北2.4m以上	N－30－W		
SI464	南北4.8m×東西4.1m以上	N－25－W	SI465→○→SB452・453	
SI465	南北1.3m以上×東西1.2m以上	N－25－W	○→SI464	
SI466	南北3.8m×東西1.8m以上	N－23－W	○→SB454	
SI467	南北1.7m以上×東西2.5m以上	E－20－N	SI468→○→SB457	
SI468	南北1.5m以上×東西3.0m以上	E－4－S	○→SI467→SB457	
SI469	南北3.3m以上×東西2.8m以上	E－2－S	○→SB457	
SI471	南北約4.1m×東西2.6m以上	N－3－E		



第19図　SX460平面図・断面図

8.　No.10トレンチ

調査区西半部のほぼ中間に設定したL字形のトレンチである。調査区中央部から南東隅にかけて河川跡があり、その南側で西1道路、北側で竪穴住居跡3棟、瓦組み暗渠1条などを発見した。

【SX450】南西隅で発見した西1道路である。東側溝SD451を検出した。SD449と重複し、それより古い。規模は、側溝心心間で4.3m以上、路幅は3.7m以上である。側溝は、上幅1.7m、下幅0.5m、深さ0.5mである。埋土は黒褐色粘質土である。

【SD439・449】西壁の断面で確認した溝状の落ち込みである。SD459によって大きく破壊されており、底面付近を残すのみである。規模は、いずれも幅0.6m以上、地山面から深さは約0.8mである。これらは北2道路の推定線上にあり、その南側溝の可能性が大きい。

【SD445】北西隅で発見した瓦組み暗渠を伴う溝跡である。SI446と重複しており、それより古い。直線距離にして約7.5m検出し、そのうち暗渠となっているのは1.8mである。暗渠は有段丸瓦を転用したものであり、さらに調査区外に続いている。構造は、有段丸瓦の凸面を上にし、有段部分に別の瓦の反対側端部を重ねて並べており、南側に向かって緩やかに傾斜している（第22図）。両端の瓦の上面で見ると、比

高差は約0.2mである。南端部の瓦の南側を断ち割ったところ、その下にも筒状になるように凹面を合わせて丸瓦が据えられている。本溝跡の規模は、暗渠部分では据え方が上幅0.3m、その南側では0.3～0.6mである。

【ＳＤ459】中央部で発見した河川跡である。東西方向にのびており、トレンチの東半部で南北方向の大規模な河川と合流している。埋土のあり方から大きく２時期に分けられる。古いＡ期は幅15.5m以上、深さ約1.5mであり、新しいＢ期は幅12.0m、深さ約1.3mである。なお、大規模な河川は幅７m確認したのみである。埋土は上層に暗褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土がありその下に灰白色火山灰ブロックを多量に含む灰黄色砂質土が堆積している。その下層には灰黄色砂質土が厚く堆積している。

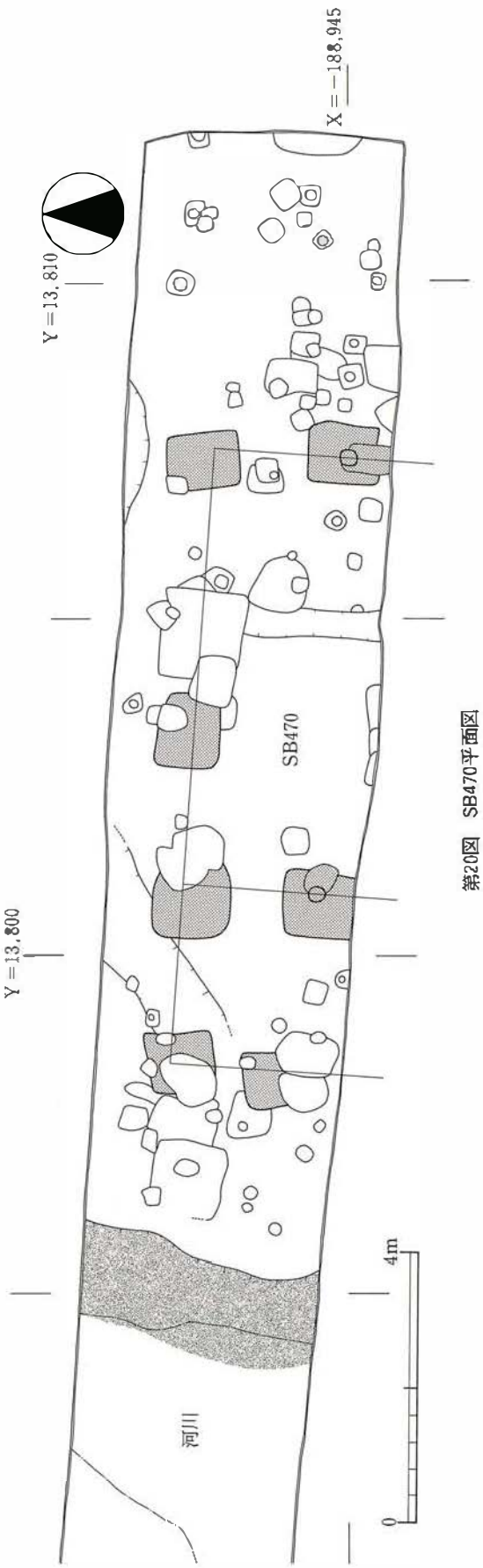
【ＳＩ446・447・448】いずれも北西隅で発見した竪穴住居跡である。ほぼ同位置で重複しており、新旧関係は古い順にＳＩ448、ＳＩ447、ＳＩ446である。方向は、いずれも北で約20度東に偏している。ＳＩ447は南北4.2m東西4.0m以上であり、深さは0.4mである。地山をそのまま床面としている。ＳＩ446は南北4.2m、東西2.6m以上である。

9. No.9 トレンチ

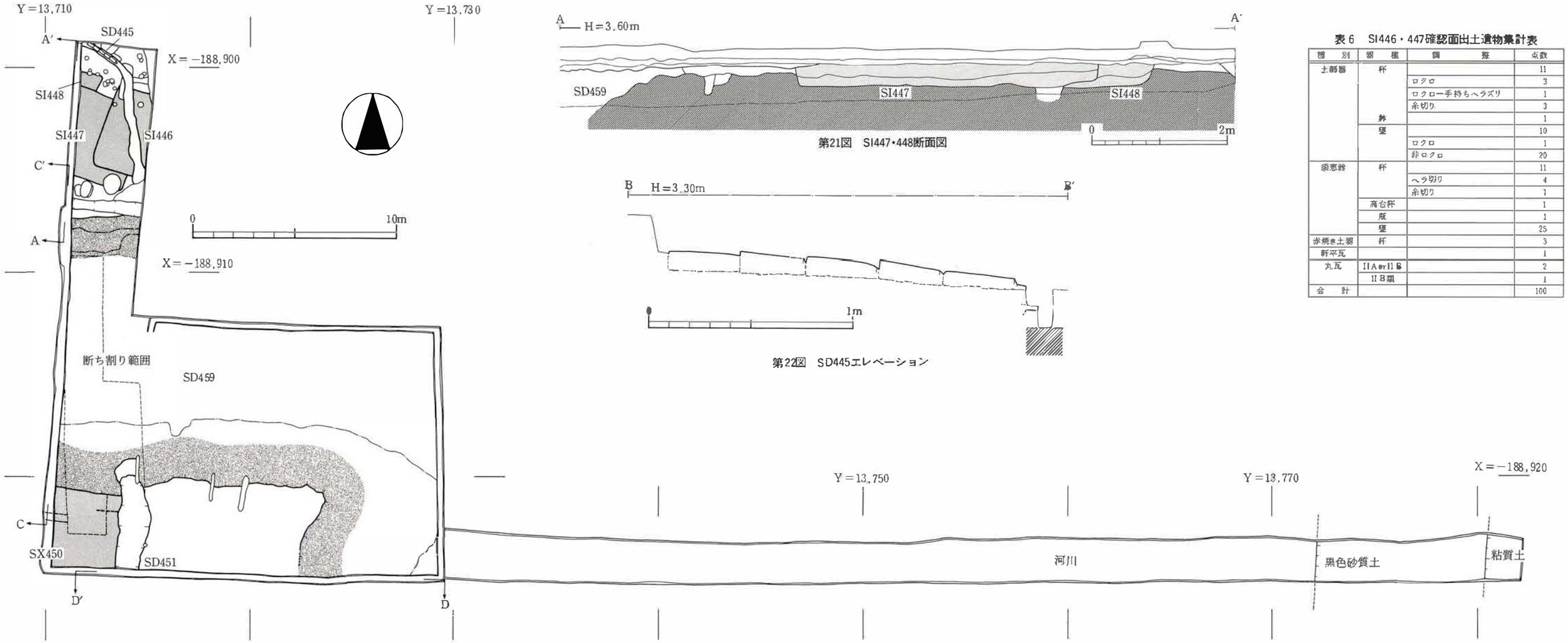
No.2トレンチの西側延長線上に設定したトレンチである。掘立柱建物跡１棟、河川などを発見した。

【ＳＢ470】南北２間以上、東西３間の規模をもつ西廂付南北棟掘立柱建物跡である。北妻と東・西両側柱をそれぞれ１間分、すなわち７基の柱穴を発見し、そのうち東側柱および西入側柱で北妻から１間目の柱穴で柱痕跡を検出した。方向は、東で約２度南に偏している。梁行については北妻が総長約9.0m、柱間は西より約2.4m、約2.6m、約3.9mである。桁行柱間については東側柱列の北妻から１間分が約2.1mである。柱穴は方形であり、規模は身舎が0.8×1.1m～1.1×1.2m、廂が0.9×1.0mである。柱痕跡は径22cmである。柱痕跡を確認した両柱穴において、掘り方埋土より新しく柱痕跡より古い楕円形の穴を検出している。柱の切り取り穴と見られる。

なお、本建物跡北妻と廂の西側においても柱穴とみられる方形のプランを発見した。規模は一辺１m以上であ



第20図　SB470平面図



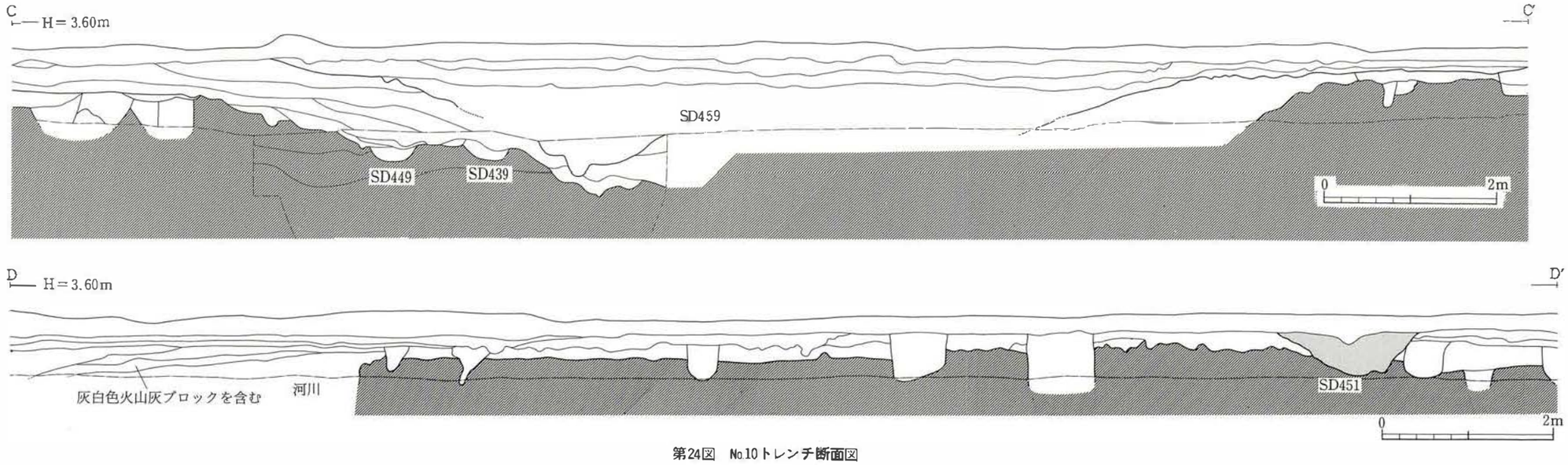
第23図　No.10トレンチ全体図

第21図　SI447・448断面図

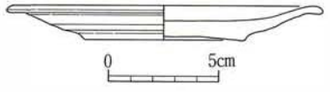
第22図　SD445エレベーション

表6　SI446・447確認面出土遺物集計表

種別	器種	調整	点数
土師器	杯		11
		ロクロ	3
		ロクロ一手持ちヘラズリ	1
		糸切り	3
	鉢		1
	甕		10
		ロクロ	1
		非ロクロ	20
須恵器	杯		11
		ヘラ切り	4
		糸切り	1
	高台杯		1
	底		1
	甕		25
赤焼き土器	杯		3
軒平瓦			1
丸瓦	IIAorIIB		2
	IIB類		1
合計			100



第24図　No.10トレンチ断面図



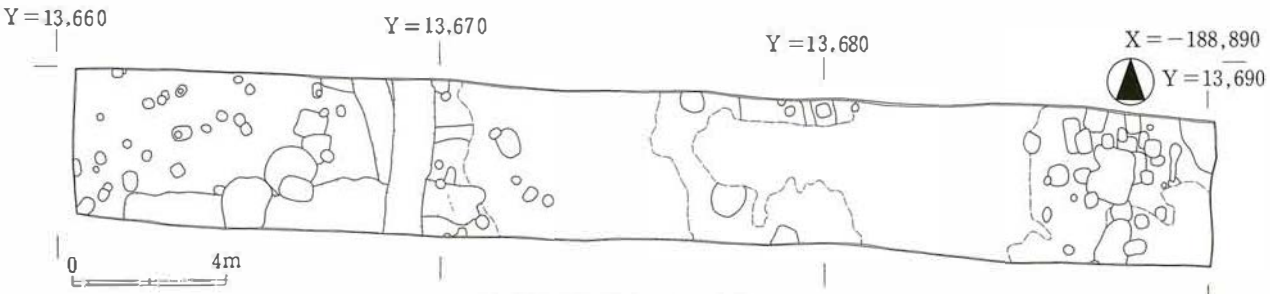
種類	層位	口径	底径	器高	登録番号
緑釉陶器皿	第1層	(14.4)	(7.2)	1.6	R−44
	【外面】口縁部：ロクロナデ，体・底部：回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ				

第25図　No.10トレンチ出土遺物

り、もう1棟別の建物の存在が想定される。

10. №8・11・12トレンチ

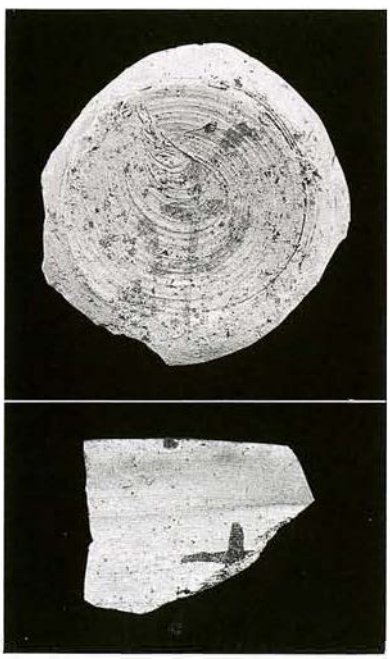
№11トレンチは№4トレンチの東側に設定した東西方向のトレンチである。溝跡や多数の小柱穴が発見されている。№8・12トレンチは調査区全体が河川埋土となっており、他の遺構は発見できなかった



第26図　№11トレンチ全体図

11. 出土遺物

表土除去から遺構検出に至る作業の中で土器、陶器、瓦などが整理用テン箱（54×34×15cm）で約27箱分出土した。表7は種別ごとに破片数を集計したものである。土師器についてみると、杯・小型杯・高台杯・椀1,013点中、調整不明の資料を除いた667点の内訳は、非ロクロ調整74点（11.1%）、ロクロ調整＋再調整48点（7.2%）、糸切り164点（24.6%）、そのほかロクロ調整321点（48.1%）である。ロクロ調整を行なっているものが79.9%と圧倒的に多く、その中でも糸切り無調整のものが多い。須恵器についてみると、杯862点中、底部の切り離しが明らかなもの369点の内訳は、再調整を行なっているもの56点(15.2%)、ヘラ切り134点（36.3%）、糸切り179点（48.5%）である。ヘラ切り・糸切りなど再調整を行なわないものは84.8%を占める。赤焼き土器は杯・小型杯・高台杯・小皿・高台皿・柱状高台皿・高台鉢などが576点出土している。多い順に№7トレンチ370点（64.2%）、№2トレンチ110点（19.1%）、№6トレンチ31点（5.4%）である。これら三つのトレンチの合計は88.7%であり、いずれも南北大路を検出したトレンチに集中していることが指摘できる。これは南北大路が10世紀前葉以降も機能していることに起因すると考えられる。多賀城周辺においては、おおよそ非ロクロ調整の土師器杯や再調整を行っている須恵器杯は8世紀、ロクロ調整の土師器杯やヘラ切り・糸切りの須恵器杯は9世紀、赤焼き土器は10世紀前葉と考えられている。出土遺物から見て、今回の調査区には8～10世紀頃の遺構の存在が推定され、中心は9世紀頃にあると考えられよう。かわらけと見られる数点の土器を除けば中世以降の遺物は出土していない。このほか、特徴的なものとして、漆付着土器が11点出土している。土器の器種は杯・甕などであり、年代は底部が回転ヘラケズリされている須恵器杯や底部に木葉痕がある土師器甕など8世紀頃のものや、赤焼き土器杯など10世紀頃のものなど各時代にわたっている。また、墨書土器が2点出土している。1点は須恵器杯の底部に「中」(第27図上)、もう1点は土師器杯の体部に墨書されているが、破片のため判読不能である（第27図下)。年代はいずれもおおよそ9世紀頃である。



上：№11トレンチ　第Ⅰ層
下：№10トレンチ　SD449　　S＝½

第27図　墨書土器

表7　トレンチ別出土遺物集計表

種別	器種	調整	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12
土師器	杯			28	29	97	21	6	59	9	69	26	1
		ロクロ		16	53	81	20	3	71	12	49	15	1
		ロクロ—手持ちヘラケズリ			2		1		3		7	6	
		回転ヘラケズリ		1	3	6			2	2	4	5	
		糸切り		19	23	35	9	2	39	4	27	4	1
		糸切り—手持ちヘラケズリ				1		1			3		
		手持ちヘラケズリ		1	13	6					1		
		非ロクロ		17	12	18	2		2	1	10	11	
	小型杯	回転ヘラケズリ				1							
		非ロクロ					1						
	高台杯			2	4	5		2	23		2	1	
		糸切り			1								
	椀										1		
	耳皿				2								
	高台有皿				1								
	鉢					1					1		
		ロクロ		1									
		非ロクロ				1							
	甕		1	51	85	305	85	16	94	18	291	219	5
		ロクロ		31	62	87	18	5	66	2	100	70	
		回転ヘラケズリ							1				
		糸切り		1	6	8			3	1	3		
		手持ちヘラケズリ							1				
		叩き成形					1						
		非ロクロ		34	64	113	32	2	106	34	150	68	
	瓶						1						
	甑			5		3	7				2		
		ロクロ						1					
	小型甕											1	
		ロクロ										1	
	羽釜					1							
須恵器	杯		3	13	95	155	26	2	20	3	118	57	1
		ヘラ切り		2	12	33	11	1	1	3	46	25	
		ヘラ切り—手持ちヘラケズリ		1	1	1				2			
		回転ヘラケズリ		4	2	9		3	2	1	2		
		糸切り		2	34	49	11	1	8	1	51	21	1
		糸切り回転ヘラケズリ				1							
		糸切り—手持ちヘラケズリ				1							
		手持ちヘラケズリ			6	4			1		4	6	
		静止糸切り—回転ヘラケズリ			3						1		
		静止糸切り—手持ちヘラケズリ								1			
	高台杯		1	5	2	15	3	1		2	3	3	
		回転ヘラケズリ		1									
		糸切り	2	1		2					1		
		静止糸切り			1								
											1		
	椀										1	1	
	高杯			1								1	
	盤			1									
	鉢椀					1							
	蓋			7	2	8		3	2	1	4	7	
	壺		11	72	160	366	65	30	98	30	216	118	5
	瓶		4	10	22	64	25	7	14		23	104	
	広口瓶							1					
	小型壺				2								
	短頸壺				1							1	
	短頸壺蓋			1									
	擂鉢					1							
赤焼き土器	杯		10	93	8	16	10	23	296		12	4	
	小型杯							1	2				
	高台杯		1	14		2	1	6	66				
	高台皿			1					4				
	小皿			2					1				
	柱状高台皿							1	1				
	鉢					2	1			1			
	高台鉢					1							
灰釉陶器	碗			1	1	2					3		
	瓶										1		
緑釉陶器	碗				1						1		
	皿										1	1	
白磁	壺							1					
平瓦	1A類			2		1							
	1B類							1					
	1C類				1	2							
	1D類			1									
	IIA類											1	
	IIB類			8	5	18	6	9	46		10	6	
	IIC類			17	5	1		1	16		1		
丸瓦	1A類					2		1				1	
	IIAorIIB		16	19	33	13	14	30	1	22	3	1	
	IIA類			6	2				1				
	IIB類					5		2	5		6		
軒丸瓦									2		1		
軒平瓦											1		
円面硯			1	1	1		1						
転用硯											1		
かわらけ		ロクロ		4		1							
その他の土器			1	14	2	14		11	4				
その他			1	5	11	6	9	6	13	1	20	12	2
合計			52	516	773	1565	381	180	1074	151	1252	797	17

V 考　　察

今回の調査で発見した遺構のうち、主に道路跡について整理し、次に調査区全体の遺構のありかたについてまとめてみたい。

1. 南北大路

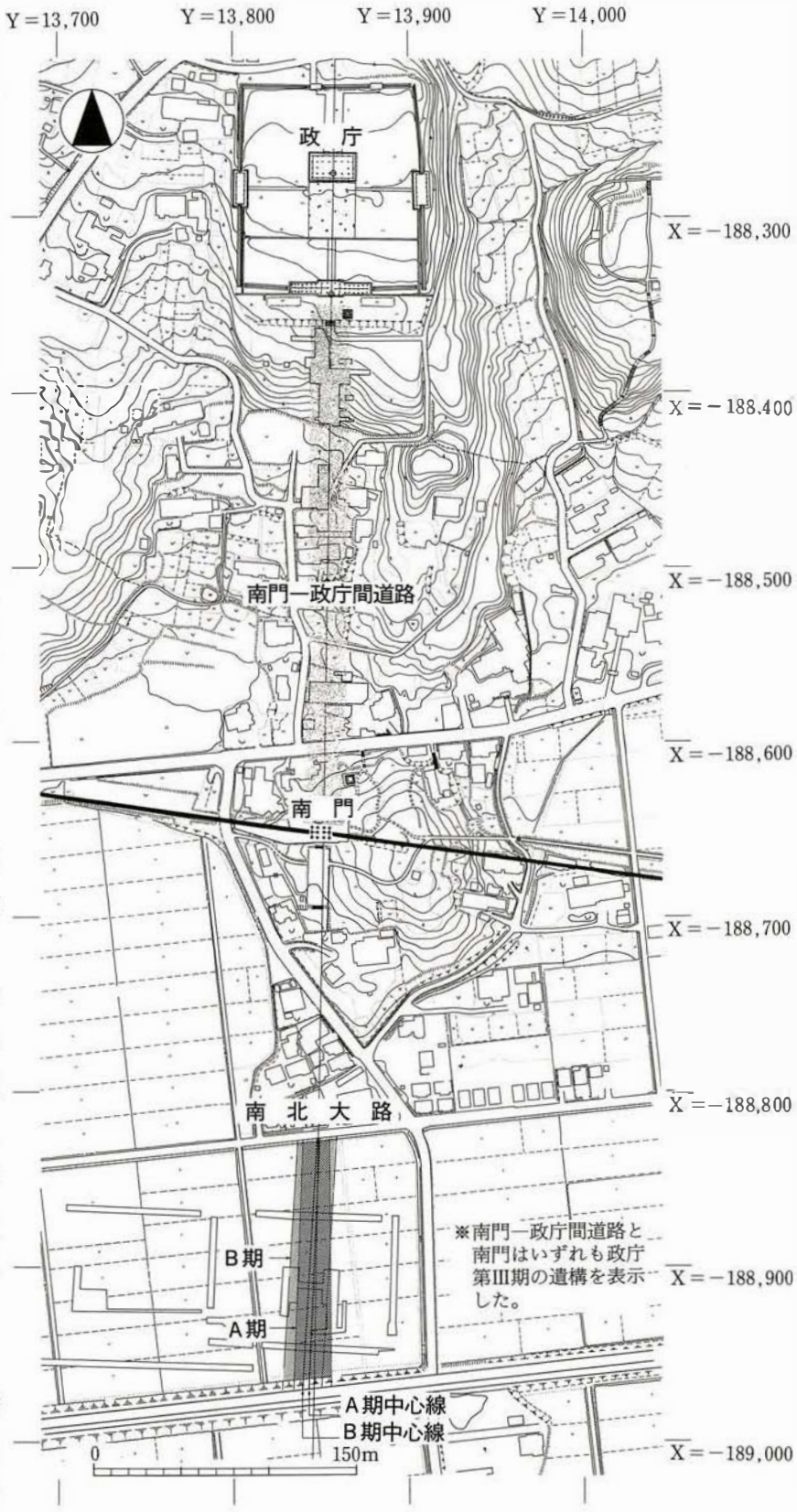
No.2・6・7トレンチにおいて検出した。No.2トレンチでは変遷をとらえることができたが、No.6トレンチでは西側溝と東側溝との対応関係が明瞭ではない。また、No.7トレンチについては側溝を平面的に検出したにとどまり、断ち割りを行っていないため、重複関係の確認や側溝間距離の測定は不可能である。このような条件の下、各トレンチ間の対応関係を整理し、その規模と位置、年代について事実関係を中心にまとめを行う。

(1) 規模と位置

はじめに、No.2・6トレンチにおける調査成果の概要をまとめると表8のとおりである。

路面幅についてみると、No.2トレンチではA期は18.52m、B期以降は22.12～23.26mである。A期とB期以降では平均で約4.3mの差が認められ、No.6トレンチにおいても同様に約4.6mの差がある。このように、道路の規模にはA期とB期以降との変遷が認められる。[2]

次に方向について説明する。No.2・6トレンチ間における路面中心点を結んだ直線は、A期は北で2度3分、B期は3度21分東に偏しており、政庁中軸線からの振れはそれぞれ約1度、約



第28図　政庁・南門と南北大路の位置

2度である。№2・6トレンチ間において西側溝中心を結んだ線は、A期は北で2度21分、H期は1度4分東へ偏しており、政庁中軸線[3]からの振れはA期は約1度、H期はほぼ一致している[4]。

次に、政庁中軸線との関係についてみると、路面の中心は、各時期ともやや西側にある。№2トレンチにおける路面中心点と政庁中軸線との距離は、A期は約1.9m、B期は最も離れて約5.5mであるが、その後東側に移動し、H期には約2.2mとなってA期に近くなっている。このように道路の中心線は必ずしも一定せず、変化していることがわかる。ただそれは不規則なものではなく、B期以降は東側に移動する傾向がうかがえる。

表8　南北大路の位置と規模

トレンチ名	時期	側溝心心間距離（路面）	路面中心点（国土座標）		路面中心点と政庁中軸線との距離	備　考
№2	A期	18.52m（17.35m）	X=−188,944.00	Y=13,844.14	1.85m	整地
	B期	22.12m（21.40m）	X=−188,943.65	Y=13,840.54	5.46m	
	C期	22.66m（20.78m）	X=−188,943.75	Y=13,841.31	4.69m	
	D期	23.26m（21.86m）	X=−188,943.80	Y=13,841.51	4.49m	
	E期	22.89m（21.10m）	X=−188,943.90	Y=13,842.32	3.67m	
	F期	22.92m（21.82m）	X=−188,943.90	Y=13,842.84	3.16m	火山灰ブロック
	G期	23.04m（21.70m）	X=−188,943.90	Y=13,843.20	2.80m	
	H期	22.80m（21.60m）	X=−188,943.90	Y=13,843.78	2.22m	
№6	A期	17.7m以上（15.7m以上）	X=−188,868.40	Y=13,846.85		整地
	B期	22.35m（21.5m以上）	X=−188,868.40	Y=13,844.96		

(2)　年　　代

次に年代について検討する。A〜H期のうち、E期の側溝には10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰が自然堆積しており（№6トレンチSD436d$_1$・№7トレンチSD412x）、F期の側溝にはそのブロックが混入している（№2トレンチSD433e・№7トレンチSD412d・SD411c$_1$）。また、H期側溝埋土からおおよそ10世紀中葉頃の赤焼き土器高台皿[5]が1点出土している（第12図）。この資料はほぼ完形品であり、残存状況も良好であることから、おおよそH期の側溝が埋没した頃に近い年代と推定され、南北大路の存続年代を示すと考えられる。これらのことから、E期は10世紀前葉以前、F期〜H期は10世紀前葉から中葉頃という年代が与えられる。次に、間接的ではあるが東西大路、南門一政庁間道路との係わりから年代を推定する。東西大路は多賀前地区の調査においてA〜I期の9時期の変遷が明らかにされている[6]。このうち、F期の側溝に灰白色火山灰が自然堆積しており、南北大路のE期に対応する。両大路はその後いずれも3回の改修がある。東西大路C期は9世紀前葉に機能していたことが判明していることから、南北大路も9世紀前葉頃まで遡る可能性が考えられる。南門一政庁間道路は8世紀前半に12m前後で造られ、9世紀初頭頃に約23mに拡張されている[7]。23mという路幅は南北大路のB期と一致し、両者が時を同じくして改修された可能性が考えられる。このことから、B期の年代もおおよそ9世紀初頭頃と推定することができ、それより古いA期の年代は8世紀代まで遡る可能性があるという見解が出されている[8]。ところで、南北大路の北端にある多賀城南門では5時期の変遷が確認されている[9]。その内、B期の門は築地線上に棟通を合わせ、おおよその位置は政庁中軸線上にある。次の仮施設段階を経たC$_2$期の門は政庁中軸線と直交し、門自体の中心線もわずかに西側に移動して南北大路のそれとほぼ合致する。この結果、政庁、南門一政庁間道路、南門、南北大路はおおよそ政庁中軸線上に並ぶことになる。このようなことから、南門の方向の変化は、南北大路の建設という外的要因によって生じた可能性が考えられよう。C$_2$期の南門の構築年代は8世紀末頃と考えられていることから、間接的ではあるが南北大路のA期も同じく8世紀末頃、すなわち政庁第III期の創建と推定することができる。

以上のことをまとめると、南北大路の年代はA期：8世紀末頃、B期：9世紀初頭頃、C〜E期：9世

紀初頭～10世紀前葉、F期～H期：10世紀前葉～中葉頃と考えられる。

2. 北２道路

No.1・4・7トレンチにおいて検出した。規模と方向についてまとめると表９のとおりである。

また、南北大路の側溝との重複関係を整理すると表10のとおりである。

表９　北２道路の位置と規模

	番号	トレンチ	最期	側溝心心間距離（路幅）	側溝中心点（国土座標）
大路西	①	No.4 トレンチ		2.52m	X＝－188,914.187 Y＝13,653.574
	②	No.7 トレンチ	IV期	（約4.3m）	X＝－188,919.6 Y＝13,828.10
大路東	③	No.7 トレンチ	V期	6.80m	X＝－188,927.65 Y＝13,859.75
	④	No.1 トレンチ		5.36m（約3.9m）	X＝－188.928.4 Y＝13,892.30

●－②　E－1°47′－S
③－④　E－1°19′－S

表10　南北大路と北２道路の関係

遺構期	北２道路（北側溝）	南北大路 西側溝	南北大路	南北大路 東側溝	北２道路（南側溝）
I期			A期		
II期		SD412a	B期		
III期	SD421b	SD412b	C期	SD413a	SD417a
IV期	SD421a	SD412c	D期	SD413b	SD417b
V期		SD412x	E期	SD413c₂	SD417c
VI期		SD412d	F期	SD413c₁	
VII期		SD412y	G期	SD413d	
VIII期		SD412e	H期	SD413e	

南北大路の東西いずれ側においても大路のA・B期にともなうものは確認できなかった。このことから南北大路と北２道路は同時に造られたものではないことがわかる。存続期間については大路の東西でやや状況が異なる。東側については、F期以降の側溝を確認できない。これはNo.1トレンチにおいてすべての側溝が第IVa層に覆われている状況からも明らかである。一方西側においても、SE419の存在から、少なくともC・D期の道路は10世紀前葉以降は機能していないと考えられる。ところで、No.7トレンチの南西隅において、地山である砂層上に灰白色火山灰ブロックの堆積を発見した。このような火山灰のあり方は、同時代の道路跡の調査で確認されており、当時の生活面より路面が低く造成されていることに起因すると見られる。SD412eがSD407の北側で西側に曲がっていることに注目すると、火山灰を検出した部分はE期以降の道路路面の可能性が考えられる。F期東側溝の西壁に取り付く北２道路はまさにその延長線上にあることから、北２道路はE期に道路１条分（路面中心が約８m）南側に移動した可能性が高いと考えられる。

3. 西１道路

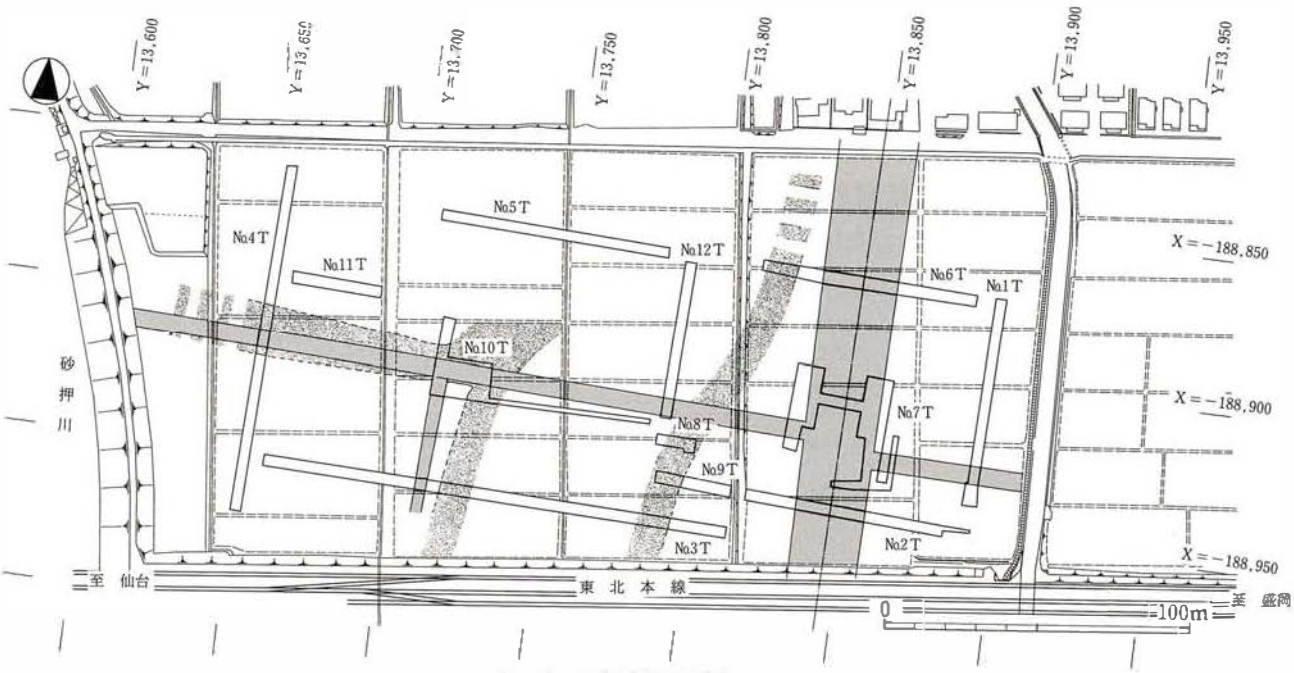
No.3・10トレンチにおいて発見した。No.10トレンチにおいては東側溝を確認したのみである。No.3・10トレンチ間における東側溝中心を結んだ線で方向をみると北で１度東に偏しており、政庁中軸線の方向とほぼ一致する。この道路はNo.10トレンチのほぼ中央部に北２道路との交差点が想定されているがSD459によって破壊されており、南側溝の一部をかろうじて検出したのみである。また、No.5トレンチにおいて延長部分を発見できなかったことより、北２道路より北側には延びていない可能性が高い。

4. 調査区全体の遺構分布

道路跡以外の遺構について簡単にまとめる。No.9トレンチでは城内の建物に匹敵するような大規模な柱穴をもつ掘立柱建物跡が発見されている。一方、No.4トレンチでは小規模な掘立柱建物跡や竪穴住居跡が多数発見されている。特に、北２道路を発見したトレンチ中央部に集中する傾向がみられる。掘立柱建物跡と竪穴住居跡が重複しているものについはいずれも掘立柱建物跡のほうが新しい。竪穴住居は主軸方向から二つのグループに分けられ、北で西に偏するものと、ほぼ北を向いているものとがある。重複しているものについてみると前者のほうが古い。No.3トレンチでは河川の西側で西１道路を発見し、道路と重複して柱列や多数の柱穴を発見した。これまで城外で発見されている道路跡で、ほぼ同時代の遺構と重複し

ているものはこれまで発見されておらず、また側溝に重複関係が認められないなど、他の道路跡とは異なった状況がみられる。

次に南北大路周辺の地形について触れておく。大路の西側には南北方向に延びる河川が発見されている。[10] 河川と大路との間隔は10〜35mであり、両者の間には遺構が密集するような状況はみられない。一方、№6トレンチ東半部と№1トレンチにおいて第IVa層が存在する。この堆積層は基盤層である砂層に近似しており、広範囲に分布すると見られることから洪水等に起因する水成堆積層と考えられる。№6トレンチではA〜D期の東側溝を完全に覆っており、その後E期以降の東側溝が浅く幅の広い形態に変化していることは、第IVa層の存在と全く無関係とは考えられない。№2トレンチ東半部では溝跡や土壙がいくつか発見されているのみであり、№1トレンチにおいても第IVa層堆積以降は古代の遺構が全く見られないなどという状況は、南北大路の東側一帯が地形的に不安定であったことを示すものであろう。このようなことから、南北大路は、河川や低地に挟まれた比較的不安定な場所に建設されているということができよう。



第29図　発見遺構概念図

5. まとめ

(1)多賀城の朱雀大路ともいうべき南北大路を発見した。

(2)南北大路の創建年代は、8世紀末頃まで遡る可能性がある。

(3)北2道路は南北大路の東側にも延びており、大路の東側にも方格地割りが存在する可能性がでてきた。西1道路は北2道路との交差点より北側には延びていない可能性が高い。

(4)南北大路の西側は約85mにわたって河川や湿地となっているが、その西側の微高地上には竪穴住居跡や掘立柱建物跡など多くの遺構が分布している。

(2) かつてA期より古い幅12mの道路が存在する可能性について触れたことがある（千葉孝弥「多賀城城外の道路と方格地割り」『古代文化』第47巻第4号　1995)。これは具体的には灰白色火山灰が自然堆積しているSX479・480をさすが、E期の側溝に同火山灰が堆積している状況を考えれば古い側溝である可能性はない。この機会に訂正しておきたい。

(3) 政庁正殿跡の南入側柱列の中央に設定された原点と、政庁南門跡のほぼ中央を通る軸線で、多賀城跡の発掘調査における南北方向の基準線。磁北に対して9°34′40″、真北に対して約2°34′40″、国土座標北に対して0°58′16″それぞれ東に偏している。

(4) 南北大路の側溝の中で、A・H期の西側溝が最も対応関係が明確であると判断したことによる。

(5) 類例は多賀城跡出土土器群の中でF群土器とされているものの中にあり、特にＳＥ317出土須恵系土器高台杯に規模・形態が類似している（白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所　1980)。ＳＥ317については「10世紀中葉以降でも古い頃」と考えられている。(宮城県多賀城跡調査研究所「II　第64次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1993』1994)。

(6) 宮城県教育委員会『山王遺跡II　―多賀前地区遺構編―』宮城県文化財調査報告書第167集　1995

(7) 南門―政庁間道路には幅約18mの時期があったと考えられ、第44次調査ではA1・A2・A3期約10m→B期約18m→C期約22mという3段階の変遷が示された(宮城県多賀城跡調査研究所「IV　政庁南面道路跡について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1983』1984)。しかし、政庁のすぐ前面の調査において、道路の痕跡が全く認められなかったことから、時期差とみたものは道路造成の際の工程差と判断され、幅18mの道路は存在した可能性がないと修正されている（宮城県多賀城跡調査研究所「II　第50次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1987』1988)。18mという数値は南北大路のA期と共通するものの、両者の関係については不明である。

(8) 高野芳宏・菅原弘樹「古代都市多賀城」『多賀城市史1　原始・古代・中世』1995

(9) 宮城県多賀城跡調査研究所「II　第48次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1985』1986

(10) No.5トレンチでは畑跡かとみられる小溝群や土壙などが発見されているのみであるが、この北側の調査によれば、南北方向の河川と湿地が多数重複していることが明らかされており、このトレンチ全体がそれらの堆積土である可能性がある。遺構面である砂層が極めて軟弱であることはそれと関係するものであろう（平成8年度、都市計画道路建設に関連して宮城県教育庁文化財保護課が調査　宮城県文化財保護課「市川橋遺跡館前地区の調査」『平成8年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』1996)。

※「V　考察」の内、特に南北大路の問題については桑原滋郎氏より多くの御教示を頂いた。

図版１　上：調査区遠景（南より）東北歴史資料館提供
下：№7トレンチ　南北大路検出状況（北より）黒く帯状に見える部分が側溝

1	2
3	4
5	
6	

図版2

1　No.6トレンチ　ＳＤ437土層堆積状況（南より）
2　No.6トレンチ　ＳＤ436土層堆積状況（南より）
3　No.2トレンチ　ＳＤ432・ＳＸ480検出状況（南より）
4　No.10トレンチ　ＳＤ445検出状況（東より）
5　No.3トレンチ　ＳＡ474検出状況（南より）
6　No.9トレンチ　ＳＢ470検出状況（東より）

多賀城市文化財調査報告書第50集

市川橋遺跡

―第11次調査報告書―

平成10年3月25日　発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）３６８－０１３４
発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目１番１号
電話（022）３６８－１１４１
印刷　今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町４－５
電話　（022）２８８－６１２３